

古 照 遺 跡

—第10・11次調査—

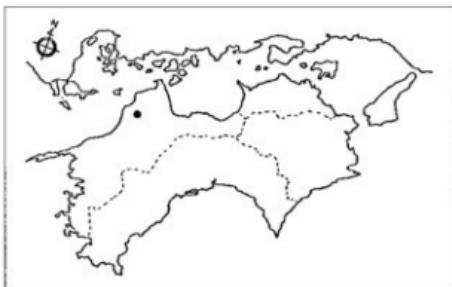
1995

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

古 照 遺 跡

—第10・11次調査—



1995

松 山 市 教 育 委 員 会

財 団 法 人 松 山 市 生 涯 学 習 振 兴 財 团
埋 藏 文 化 財 センター

序

本書は、平成5・6年度にかけて発掘調査しました古照遺跡の第10・11次調査の概要報告書です。

古照遺跡は、昭和47年に発見されて以来その後の本格調査によって古墳時代前期に造られた灌漑用の「井堰」であることが判明し、当時の大規模な土木工事が営まれた痕跡を残す貴重な遺跡であります。

第10次調査では、古墳時代中期前半の祭祀遺物のほか、平安時代中頃の遺物が出土し、また第11次調査では、中世の水田跡や地鎮祭的遺構などが検出され、いずれも松山平野の古代・中世の研究に欠かせない資料が発見されました。

本報告書をまとめるにあたり、ご協力いただいた多くの方々に対し厚くお礼申し上げ、今後とも一層ご協力ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成7年3月31日

財團法人 松山市生涯学習振興財団
理事長 田 中 誠一

例　　言

1. 本書は、財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが平成4・5年度に実施した、松山市南江戸4丁目1-1の松山市下水道中央浄化センター内に所在する古照遺跡の第10・11次調査の概要報告書である。
2. 第10次調査は平成5年度における地下連絡通路、第11次調査は平成6年度における汚泥消化タンクの各施設建設工事に伴う緊急発掘調査として実施した。
3. 平成5年度は松山市下水道部下水道建設第1課、平成6年度は同市下水道部下水道建設第3課の委託を受けて発掘調査を実施した。
4. 遺構のうち表示記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例を参考にした。
S B : 沖立柱建物跡、S A : 構造、S D : 溝、S K : 土坑、S R : 自然流路、S P : 柱穴、
S X : 性格不明
5. 遺構の製図・浄書等は各調査担当者の責のもと、山邊進也、田丸竜馬、鎌田謙二、向井大作、篠崎正記、久保浩二、前田伸哉、松本幸世、藤田美恵子、真木雅子、乗松和枝、種田千津子、岡市美紀、山本仁美、菅摩理、西島優子、上野山志保、末光博武、日名子利光、安部隆一郎、藤本數夫、岩岡慎一、大西等が行った。
6. 遺物の実測・浄書等は各調査担当者の責のもと、多知川富美子、萩野ちよみ、関正子、吉井信枝、矢野久子、篠森千里、山内七重、石井美鈴、室谷美也子、大谷志奈、西島優子、仙波ミリ子、仙波千秋、高尾久子、金子育代、宮田里美、猪野美喜子が行った。
7. 調査における遺構等の撮影は大西朋子と各調査担当者が、また遺物の撮影は大西朋子が実施した。
8. 使用した方位は、すべて磁北である。
9. 本書の執筆・編集は栗田正芳、小笠原善治、河野史知が各自分担して行った。
10. 調査中には、㈱日本上下水道設計、㈱月島機械、㈱井原工業、㈱仲和建設の各社に便宜を計って頃いた。
11. 調査にあたり、愛媛大学法文学部下條信行先生からご指導とご助言を賜った。
12. 本書にかかる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	(栗田)
1. 遺跡の立地	P 1
(1)地理的環境	
(2)歴史的環境	
2. 過去の調査結果	P 8
3. 調査・刊行組織	P 13
第Ⅱ章 第10次調査の概要	(栗田・小笠原)
1. 調査に至る経緯と経過	P 17
(1)調査に至る経緯	
(2)調査組織	
(3)調査の経過	
2. 層位	P 24
3. 遺構と遺物	P 28
第Ⅲ章 第11次調査の概要	(河野)
1. 調査に至る経緯と経過	P 43
(1)調査に至る経緯	
(2)調査組織	
(3)調査の経過	
2. 層位	P 46
3. 遺構と遺物	P 55
第Ⅳ章 調査の成果と課題	(小笠原・河野)
1. 第10次調査	P 65
2. 第11次調査	P 66

挿図目次

第1図	松山平野の地形分類図	P 2
第2図	周辺の遺跡分布図(縮尺1/25000)	P 5
第3図	調査地位置図(縮尺1/2400)	P 13
<第II章 第10次調査>		
第1図	調査区グリット設定図(縮尺1/600)	P 19
第2図	XV層遺構全測図(縮尺1/100)	P 21
第3図	基本層位図(縮尺1/40)	P 24
第4図	調査区層位図(縮尺1/60)	P 25
第5図	A[X・B]X S D 1 出土遺物実測図(縮尺1/4)	P 29
第6図	籠状遺物モデル図	P 30
第7図	B[X] S D 1 及び遺構外出土遺物実測図(縮尺1/4)	P 31
第8図	B区出土木製品実測図(縮尺1/3)	P 31
第9図	杭列断面図(縮尺1/40)	P 32
第10図	祭祀土器群平面断面図(縮尺1/20)	P 33
第11図	B区出土木製品実測図(縮尺1/4)	P 33
第12図	祭祀土器群実測図(縮尺1/4)	P 35
第13図	C区及び調査区外出土遺物実測図(縮尺1/4)	P 37
第14図	調査区外出土遺物実測図(縮尺1/4)	P 38
第15図	榜味立派遺跡・朝倉南甲遺跡出土遺物実測図(縮尺1/5)	P 39
<第III章 第11次調査>		
第1図	調査区グリット設定図(縮尺1/400)	P 45
第2図	東壁土層図(縮尺1/50)	P 47
第3図	第VI層遺構平面図(縮尺1/100)	P 49
第4図	第VII層遺構平面図(縮尺1/100)	P 51
第5図	第VIII層遺構平面図(縮尺1/100)	P 53
第6図	第VI層出土遺物実測図(縮尺1/4)	P 55
第7図	S B 1・2 測量図(縮尺1/80)	P 57
第8図	S B 3、S A 1・2 測量図(縮尺1/80)	P 58
第9図	S K 1 測量図(縮尺1/10)	P 59
第10図	S K 1 出土遺物実測図(縮尺1/4)	P 60
第11図	S K 1 出土遺物拓影図(縮尺1/1)	P 61
第12図	S K 2 測量図(縮尺1/20)	P 62

第13図 第VII層出土遺物実測図(縮尺1/4)	P 63
--------------------------------	------

表 目 次

〈第Ⅲ章 第11次調査〉

表1 SK 1 出土鉄一覧表	P 64
----------------------	------

写真図版目次

〈第Ⅱ章 第10次調査〉

図版1 1. A区全景(南から)	P 69
2. 北東壁断面状況(西から)	P 69
図版2 1. B区全景(南から)	P 70
2. 造構検出状況(西から)	P 70
図版3 1. 東壁断面全景(南西から)	P 71
2. 南壁断面状況(北から)	P 71
図版4 1. S D 1 及び土層検出状況(東から)	P 72
2. S D 1 検出状況(北から)	P 72
図版5 1. 杭1断面状況(北から)	P 73
2. 杭2断面状況(北から)	P 73
図版6 1. 遺物出土状況	P 74
2. 遺物出土状況	P 74
3. 遺物出土状況	P 74
4. 遺物出土状況	P 74
図版7 1. 遺物出土状況	P 75
2. 瓢状木製品出土状況(北から)	P 75
図版8 1. 南東壁隅部 S D 1 下部断面状況(西から)	P 76
2. C区作業風景(北西から)	P 76
図版9 1. C区全景(北西から)	P 77
2. 遺物出土状況(北西から)	P 77
図版10 1. 遺物出土状況	P 78
2. 祭祀土器群遠景(東から)	P 78
図版11 1. 祭祀土器群検出状況(東から)	P 79
2. 祭祀土器群検出状況(北から)	P 79

図版12	1. 杭列断面状況(北から).....	P 80
	2. 杭断面状況(南から).....	P 80
図版13	1. 東壁断面状況(西から).....	P 81
	2. 東壁断面全景(南西から).....	P 81
図版14	1. B区 S D 1 出土遺物.....	P 82
	2. B区 S D 1 出土遺物.....	P 82
図版15	1. B区 S D 1 出土遺物・B区出土籠状遺物.....	P 83
図版16	1. B区出土木製品.....	P 84
図版17	1. C区出土祭祀器群.....	P 85
図版18	1. C区出土祭祀土器群.....	P 86
図版19	1. C区出土遺物・調査区外出土遺物.....	P 87
<第III章 第11次調査>		
図版 1	1. 調査地全景(西から).....	P 91
	2. 作業風景(北西から).....	P 91
図版 2	1. 東壁土層(西から).....	P 92
	2. 第VI層上面遺構検出状況(南から).....	P 92
図版 3	1. 第VI層遺上面構完掘状況(南から).....	P 93
	2. 第VI層上面遺構完掘状況(北から).....	P 93
図版 4	1. 第VII・VIII層上面遺構検出状況(南から).....	P 94
	2. SK 1 遺物及び遺構検出状況(北から).....	P 94
図版 5	1. SK 1 遺物出土状況(東から).....	P 95
	2. SK 1 遺構完掘状況(南から).....	P 95
図版 6	1. SK 2 遺構完掘状況(南東から).....	P 96
	2. SP 36 遺構完掘状況(西から).....	P 96
図版 7	1. SP 84 遺構完掘状況(西から).....	P 97
	2. 第VII・VIII層上面遺構完掘状況(東から).....	P 97
図版 8	1. 第VII・VIII層上面遺構完掘状況(南から).....	P 98
図版 9	1. 第VII・VIII層上面遺構完掘状況(北西から).....	P 99
	2. 第VIII層上面足跡完掘状況(北から).....	P 99
図版10	1. 第V層出土遺物	P 100
	2. SK 1 出土遺物	P 100
図版11	1. SK 1 出土遺物	P 101
図版12	1. 第VII層出土遺物	P 102

第Ⅰ章 はじめに

1. 遺跡の立地

(1) 地理的環境

松山平野は、愛媛県のはば中央部、高縄半島の付け根部分に位置する。この高縄半島中央部には、半島最高峰の東三方ヶ森をはじめ、北三方ヶ森、伊之子山、高縄山からなる高縄山地が形成されている。この高縄山地に源を発した河川によって形成された沖積平野が松山平野である。

古照遺跡は、この沖積平野のやや西側にあり、東に勝山(132.1m)、北に大峰ヶ台(133.7m)、北西に岩子山(116m)、西に弁天山(129.7m)の分離丘陵に囲まれて立地している。

松山平野を流れる河川のうち、北東から南西方向に平野を斜めに横切って流れる石手川があり、古照遺跡の南々西約3.8kmの地点で平野の南よりのところを東の山地から西に向かって流れる重信川と合流して伊予灘へ注いでいる。

古照遺跡と関係の深い石手川は、高縄山地に水源を発し、山地を激しく浸蝕開析し、山麓部から平野部に出てから急激に土砂礫を堆積させ扇状地を形成している。さらに下流で宮前川などの小河川に分流している。

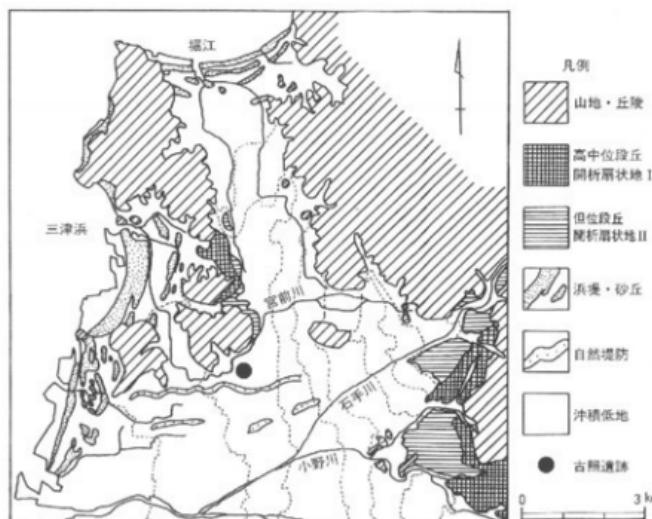
宮前川は、岩櫃で石手川から分岐した後、道後城北地区を流れて大峰ヶ台丘陵の東麓で大きく右折し、古照遺跡の北側を流れている。また、古照遺跡の南側を西流する石手川支流の中ノ川と南西で合流し、更に分岐し北・西の2条の流れとなって伊予灘に注いでいる。

石手川によって形成された扇状地は、標高約50mの石手守付近を扇頂とし半径は約4km、標高約20mまでの部分であり、これより西方は氾濫・堆積によって形成された氾濫原の地域である。扇状地の地表勾配は約1000分の5~10程度である。この扇状地の扇端付近、標高約12.8mに古照遺跡が位置している。

古照遺跡周辺の丘陵について地質的には、まず、大峰ヶ台の南半分は和泉層群の貞岩・砂岩・礫岩、東側一部は石錐層群の閃緑玢岩、北半分は領家貫入岩類の花崗閃緑岩である。岩子山は石錐層群の安山岩、弁天山は南側が和泉砂岩群、北側は領家变成岩類塙基性ホルンヘルスである。

【参考文献】

- *平井幸弘 「石手川扇状地域北地区における沖積低地の地形発達と考古遺跡の立地環境」『愛媛大学教育学部紀要III 自然科学』9, 愛媛大学 1989
- *平井幸弘 「鷺子遺跡および樽味遺跡をとりまく地形環境」『鷺子遺跡・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室 1989
- *『愛媛県史－原始・古代 I－』愛媛県史編さん委員会 1892
- *『松山市史－第1卷－』松山市史編集委員会 1992
- *『古照遺跡』古照遺跡調査本部・松山市教育委員会 1974



第1図 松山平野の地形分類図

(2) 歴史的環境

古照遺跡周辺には、数多くの遺跡が分布しており、これらの遺跡について最近の調査結果から時代別に述べていくこととする。

◇縄文時代

縄文時代の遺跡はいまだ確認されていない。古照遺跡の北方にある大峰ヶ台丘陵の東側に所在する朝美澤遺跡2次調査地や松環美沢遺跡から縄文式土器の出土例がある。また、古照遺跡の既往調査でも河川の砂礫堆積層から前期末～晩期にいたる土器が出土している。これらのことから宮前川の上流域である大峰ヶ台丘陵の東側周辺に縄文時代の遺跡が存在するものと考えられる。

◇弥生時代

弥生時代には、各丘陵部や宮前川の周辺部に遺跡の分布が認められている。

前期には、朝美澤遺跡2次調査地では前期前半の包含層が確認されている。古照遺跡の西部にある弁天山丘陵の東側に突出した小丘陵上に位置する齊院鳥山遺跡からは前期末段階の濠状遺構が検出されており、同丘陵中央東麓の宮前川左岸の後背湿地に立地する宮前川別府遺跡からは前期末～中期前半の土器や朝鮮系無文土器などが出土している。

中期には、大峰ヶ台丘陵の山頂部に高地性集落の大峰台遺跡があり、同丘陵東側部の澤遺跡・辻遺跡からも中期中葉段階の土器が出土している。また、前述の松環美沢遺跡では中期の溝が検出され石臼^トや有柄式磨製石器などが出土している。

後期になると遺跡の分布は後背湿地にまで広がりを見せている。前述の澤遺跡からは豪棺墓や堅穴式住居址などが検出されている。また、弁天山丘陵の東麓緩斜面に位置する津田鳥越遺跡では堅穴住居址群が検出され後期後半～庄内段階の土器と共に土鍤・石鍤などの漁撈具が出土している。古照遺跡の東側にある松環古照遺跡からは弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての土器が出土し、未調査ではあるが方形状の周溝が8条確認されている。

◇古墳時代

古墳時代には、弥生時代と同様に遺跡が分布し、大峰ヶ台や岩子山、弁天山などの各丘陵において多数の古墳が確認されている。

古墳時代初頭には、前述の津田鳥越遺跡や宮前川北斎院遺跡を中心に堅穴住居址などが検出され、宮前川下流域に当該期の集落が存在している。また、山陰系・畿内系の外米系土器もあり当時の流通・交易の経路を考える上で貴重な遺物の出土がみられる。

古照遺跡の隣接地域では、未だこの時期の集落は確認されていないが、前述の松環古照遺跡から当該期の遺物の出上がみられる。

古墳時代前期の集落遺跡は未だ確認されていない。古照遺跡第8次調査において溝造構が確認され当該期の土師器が出土し、「井堰」と関連する遺構と考えられる。

古墳時代中期では、古照ゴウラ遺跡3次調査地から前半の祭祀遺構が検出されている。後

半では大峰ヶ台丘陵の東側、宮前川左岸にある辻町遺跡2次調査地で中期後半の竪穴住居址が3棟検出され、周辺に集落が存在している。

後期に入ると辻町遺跡並びに辻町遺跡2次調査地で祭祀関連遺構が調査され、土師器・須恵器などが多く出土している。また、松環古照遺跡においても河川祭祀に伴う土師器の出土がみられ、祭祀的行為が行われた痕跡が古照遺跡の周辺で数多く調査されている。また、大峰ヶ台丘陵の東緩斜面周辺部の辻遺跡2次調査地、松環大峰ヶ台地区からは掘立柱建物跡が検出され、大峰ヶ台丘陵の東側に後期の集落が存在している。

また、岩子山丘陵の南西部周辺からも後期の須恵器を出土しており、集落関連遺構があるものと考えられる。

前期古墳は、大峰ヶ台丘陵の北西尾根部に朝日谷2号墳があり、主体部内から2面の舶載鏡(二禽二獸鏡など)と40本を越える銅鏡・鉄鏡のはか直刀・ガラス玉などが出土し、墳丘くびれ部からは壺型上器が出上している。また、弁天山丘陵には墳丘調査から前期古墳と思われる弁天山0号墳が確認されている。

中期末～後期にかけては、各丘陵に群集墳が出現している。大峰ヶ台丘陵には客谷古墳群が、岩子山丘陵に岩子山古墳群と同丘陵の尾根周辺に齊院茶臼山古墳、御産所11号墳、御産所權現山遺跡の1・2号墳があり、弁天山丘陵には弁天山古墳群がある。

◇歴史時代

古照遺跡は、大宝律令以後は温泉郡に属している。本遺跡周辺には現在も長地型の条里的地割りが残っており、古代莊園制との関係が指摘されているが明らかではない。

北斎院遺跡や御産所權現山遺跡からは7～8世紀の土師器・須恵器が出土している。

古代寺院としては、大峰ヶ台丘陵東裾部にある親和園前遺跡から「澤庵寺」に關連する複弁蓮華軒丸瓦が出土し、掘立柱建物跡が検出されている。また、同丘陵南麓には大宝元(701)年創立の大宝寺があり、同寺本堂は県下でも最古の鎌倉時代前期の建造物であり国宝に指定されている。

古照遺跡周辺では、11～14世紀にいたる集落址が確認されている。まず、松環古照遺跡・古照ゴウラ遺跡からは掘立柱建物跡、区画溝、土坑、曲げ物井戸跡などが検出され、和泉型瓦器、黒色土器、東播系鉢・甕、亀山焼甕、常滑焼甕、滑石製石鍋など11～13世紀にかけての遺物が多量に出土している。古照遺跡第6・7次調査においても、11～16世紀前半の遺構や遺物を出土している。また、古照遺跡の北約30mの南江戸闘日遺跡からは、13世紀後半の集落関連遺構が検出され、多数の土師器が出土している。

大峰ヶ台丘陵南西尾根部に中世城郭として花見山城跡が確認されている。同丘陵の東尾根周辺の松環大峰ヶ台地区では14～16世紀にかけての竪穴住居跡が検出されており新資料として注目される。また、澤庵寺からは平安時代の掘立柱建物跡、朝美澤遺跡2次調査では掘立柱建物跡、辻遺跡2次調査地では土坑墓が検出されている。



第2図 周辺の遺跡分布図（縮尺1/25000）

宮前川下流域においても、古代から中近世にかけての遺跡が分布しており、古照遺跡の西方約1kmの北斎院地内遺跡では15~16世紀代の集落址が、宮前川三本柳遺跡では奈良時代の井戸関連遺構や中世の烟、近世の井戸などが検出されている。

江戸時代には、親和園前遺跡から末期の陣屋跡が、美沢遺跡の屋敷跡からは水琴窟が検出されている。また、大峰ヶ台丘陵南東裾部の南江戸桑田遺跡からは、桶棺墓が多数検出されている。また、古照遺跡第6次上層調査では江戸時代中期の洪水によって埋没した水田・畑・大畦畔跡などが検出されている。

【参考文献】

- *『古照遺跡・古照遺跡調査木部』松山市教育委員会 1974
- *『岩子山古墳』松山市教育委員会 1975
- *『御廬所11号墳』松山市教育委員会 1976
- *『古照遺跡II』松山市教育委員会 1976
- *『斎院茶臼山古墳』松山市教育委員会 1983
- *『南江戸園目遺跡』松山市教育委員会松山市立埋蔵文化財センター 1991
- *『朝美澤遺跡・辻町遺跡』徳松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1992
- *『古照遺跡－第6次調査－』松山市教育委員会、徳松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1993
- *『古照遺跡－第7次調査－』松山市教育委員会、徳松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994
- *『斎院の遺跡』松山市教育委員会、徳松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994
- *『松山市埋蔵文化財調査年報I』松山市教育委員会 1987
- *『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会 1989
- *『松山市埋蔵文化財調査年報III』松山市教育委員会松山市立埋蔵文化財センター 1991
- *『松山市埋蔵文化財調査年報IV』松山市教育委員会松山市立埋蔵文化財センター 1992
- *『松山市埋蔵文化財調査年報V』松山市教育委員会、徳松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1993
- *『松山市埋蔵文化財調査年報VI』松山市教育委員会、徳松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994
- *『宮前川遺跡』財愛媛県埋蔵文化財調査センター 1987
- *『一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書I－松環占照遺跡－』財愛媛県埋蔵文化財調査センター 1993
- *『一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書II－大峰ヶ台地区－』財愛媛県埋蔵文化財調査センター 1994
- *『北斎院地内遺跡(三次調査)』財愛媛県埋蔵文化財調査センター 1994
- *『斎瀬の考古学』大西町教育委員会 1993
- *『松山市史料集第1巻－考古編－』松山市史料集編集委員会 1980

- *『松山市史－第1巻－』松山市史編集委員会 1992
- *『松山市の文化財』松山市教育委員会 1980
- *『愛媛県史－原始・古代I－』愛媛県史編さん委員会 1982
- *『愛媛県史資料編－考古－』愛媛県史編さん委員会 1986
- *『愛媛県中世城館跡－分布調査報告－』愛媛県教育委員会 1987

2. 過去の調査結果

古照遺跡は、昭和47年11月、下水道中央処理場建設工事中に木組み造構が発見され、当初は弥生時代の堅穴住居址として全国的に注目された。早速、国・県・市内外の研究者による調査団が組織された。同年12月～翌48年1月にかけて処理場敷地内に予備調査として1,755本のボーリング調査を実施し造構周辺の地質を調査した。結果、木質集中地点等が数カ所で確認された。

◇第1次調査(文献1)

昭和48年7～8月にかけて発掘調査が実施され、この調査が第1次調査である。

発見された木組み造構は農業灌漑用の「堰」であることが確認された。結果、堰を2基検出した。「第1堰」は南北13.2m、「第2堰」は東西23.8mを測り古墳時代前期に機能していたことが判明した。

「第1堰」北側の取付部は青灰色粘土、「第1堰」南側と「第2堰」との共通取付部は黒色粘土、「第2堰」東側は青灰色粘土である。この「第2堰」東端粘土上で幅1.2mの畔状造構が検出され、この両縁に20～30cm間隔で杭が打たれていた。

堰による河川基底層は、青灰色砂質土である。

これら堰周辺の青灰色粘土・黒色粘土層において少量のイネ花粉が確認され、水田の早期的段階のものと指摘されている。また、これら堰を被覆する砂礫層上部の黒色泥層(上部互層-III)からは多量のイネ花粉を確認している。この黒色泥層より上位の砂礫層から須恵器などが出土しているが、黒色泥層について明確な時期決定はなされていない。

調査報告書では、これら堰の構築方法や自然・地形環境、保存方法、当時の切妻造り高床建物の復元などについて言及されている。

◇第2次調査(文献2)

昭和49年12月～翌50年1月にかけて、「第2堰」から東方に延びる青灰色粘土の調査を主目的に第2次調査を実施した。

結果、「第2堰」東の青灰色粘土は、青灰色細砂層から砂礫層へと変わり残塊的なものであったが、「第2堰」東端から南北方向へ延びる全長約20mの「第3堰」(堰としての機能は約5.8m)が検出され、この堰の南側で幅約2mの取水口も検出された。この「第3堰」南西端の取付部は青灰色粘土である。

—— 第1・2次調査において検出された、これら三基の堰について工楽善通氏は、第1・2堰が同時に機能していたことは確かで、堰構築当初は第1・3堰が存在し、第3堰が早くに崩壊したため第2堰に切り替えて第1・2堰が同時に機能していたところへ大きな出水があり埋没したのではないかと指摘されている(1)。 ——

◇第3次調査

昭和51年9月、2次調査地のやや南東部において第3次調査を実施した。調査では青灰色粘土層などは検出されていない。流木や土器などが出土している。

◇第4次調査

翌52年9～10月にかけて2次調査地の南西部、3次調査地の西側において第4次調査を実施した。

結果、「第1・2堰」共通取付部の延長とみられる黒色粘土層を確認し、この粘土層に接して連続する青灰色粘土層を検出した。この青灰色粘土層は自然堤防状を呈し、この南東端付近で多量の流木を出土した。

◇第5次調査(文献3)

平成元年8月、3次調査地の南側において第5次調査を実施した。

結果、残塊的な青灰色粘土や青灰色細砂層を検出した。縄文時代～古墳時代にいたる上器が出土している。

以上の既往調査地は1・2次調査地の南側におけるものである。河川影響により堰に伴う明確な古墳時代の水田跡は確認されていない。また、堰検出の標高約8.0m前後における調査であった。しかし、掘削時の表土層から中近世土器を出土し、遺跡の存在が指摘されていた。

◇第6次調査(文献4)

平成2年4月～翌年3月にかけて、1次調査地の北側、東西約238m、南北約70mを調査した。

まず、江戸時代中期前半の水田・畠造構、15世紀代の造構、13世紀代の造構が現地表から約2mまでの間で調査された。

調査地の北側では標高約9.50mを測る黒褐色粘土が広がり、この粘土より以東では残塊的な緑灰色粘土が検出された。また、第1次調査前のボーリング調査によって木質集中地点とチェックされていた箇所から縄文時代後期の流木群が検出された。

古墳時代前後において、河川による影響がほとんどで見られた。

◇第7次調査(文献5)

平成3年10月から翌年3月までの間、A・B地区の2箇所を調査した。

まずA地区では、平安時代の農耕造構、13世紀代の水田造構、中世の土坑群が検出され、当該期の土器が出土している。標高約8.00mにおいて層厚約50cmを測る緑灰色シルトが調査区全域に堆積していた。

B地区は、13世紀前後の造構・造物が調査された。標高約9.40mで黒褐色粘土が堆積していた。この黒褐色粘土は、第6次下層調査最終沈澱池地区で検出されている黒褐色粘土であ

り、西方へ連続していることが判明した。

◇第8次調査(文献6)

平成4年度に6次調査地の北側を上層(中近世)と下層に分けて行った。

上層調査では、第6次調査で検出された江戸時代の埋没水田跡や中世遺構の広がりが確認された。その中で特に中世墓から湖州六花鏡1面が出土している。

下層調査では、第6次調査で検出された粘土層の北側への広がりが確認された。また、井堰埋没時期と同時期の構造から上師器の出土がみられ、弥生時代終末から古墳時代中期前半(5世紀前半)にいたる堆積上層が層位的に確認された。

◇第9次調査(文献6)

平成4年度に6次調査地の南東部を調査した。ここでも上層と下層に分けて調査を行った。

まず上層調査では、中世の水田跡の他に8次調査地で確認された古墳時代中期前半の土層上面から祭祀的遺物を出土した。

下層調査では、前述の古墳時代中期前半の土層下は、厚い砂礫層が堆積しており、その下層で古墳時代前期の上層を一部で確認できた。

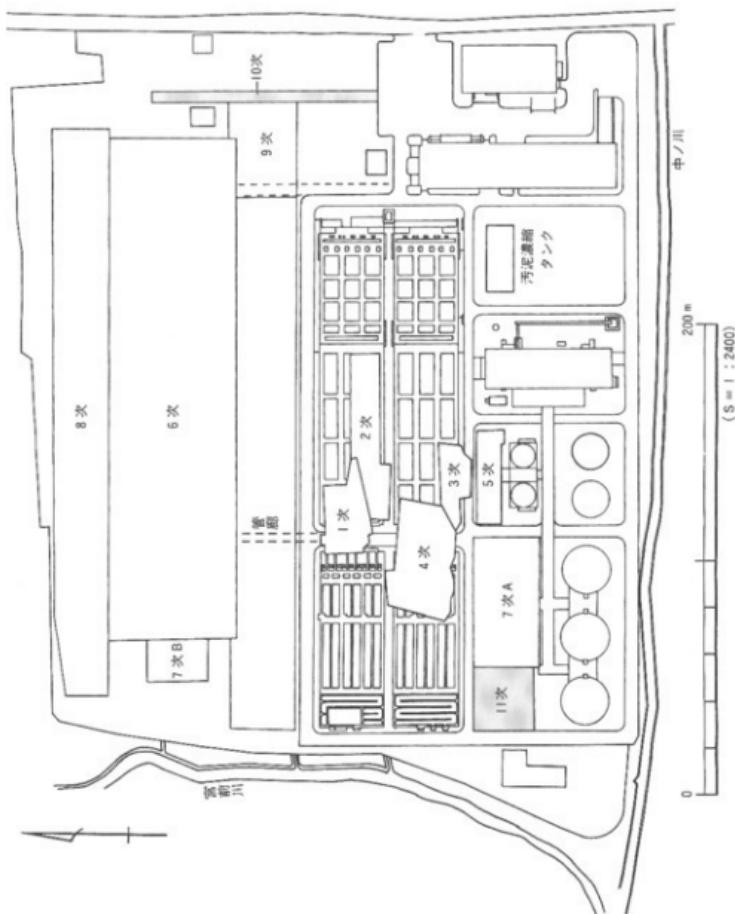
第6～9次調査の結果から、古墳時代前期の井堰周辺の地形がある程度は明らかになったが、まだ畦畔に区画された様な水田跡は確認できていない。また、井堰と同時期の遺構が淨化センターより北側に存在するであろう事が推測される。

【註】

- (1)工衆 普通 『水田の考古学』東京大学出版会 1991

【文献】

- 1.工衆普通・森 光晴他 「古照遺跡」古照遺跡調査本部・松山市教育委員会 1974
- 2.森 光晴 「古照遺跡II」松山市教育委員会 1976
- 3.松村 洋 「古照遺跡5次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報III』松山市教育委員会・財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1991
- 4.栗田正芳・河野史知他 「古照遺跡－第6次調査－」松山市教育委員会・財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1993
- 5.栗田正芳 「古照遺跡－第7次調査－」松山市教育委員会・財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994



第3図 調査地位置図

6.栗田正芳・河野史知「古照遺跡8・9次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994

【参考文献】

- *笠原安夫・森 光晴他「古照遺跡 資料編」松山市教育委員会 1977
- *愛媛県史編さん委員会「愛媛県史－原始・古代 I－」1982
- *松山市史編集委員会「松山市史第1巻－自然・原始・古代・中世－」 1993
- *坪井清足他「古照遺跡とその時代－遺跡発見20年を経過して－(講演会資料)」松山市考古館 1993

3. 調査・刊行組織

平成 5 年度：第10次調査

松山市教育委員会	教育長	池田尚郷
生涯教育部	部長	渡辺和彦
次	長	日野正寛
次	長	渡部泰輔
次	長	三好俊彦
文化教育課	課長	松平泰定
松山市生涯学習振興財団	理事長	田中誠一
	事務局長	渡辺和彦
	事務局次長	一色正士
埋蔵文化財センター	所長	河口雄二
次	長	田所延行
	調査係長	田城武志
調査担当	調査主任	栗田正芳(文化教育課職員)
"	調査員	小笠原善治

平成 6 年度：第11次調査

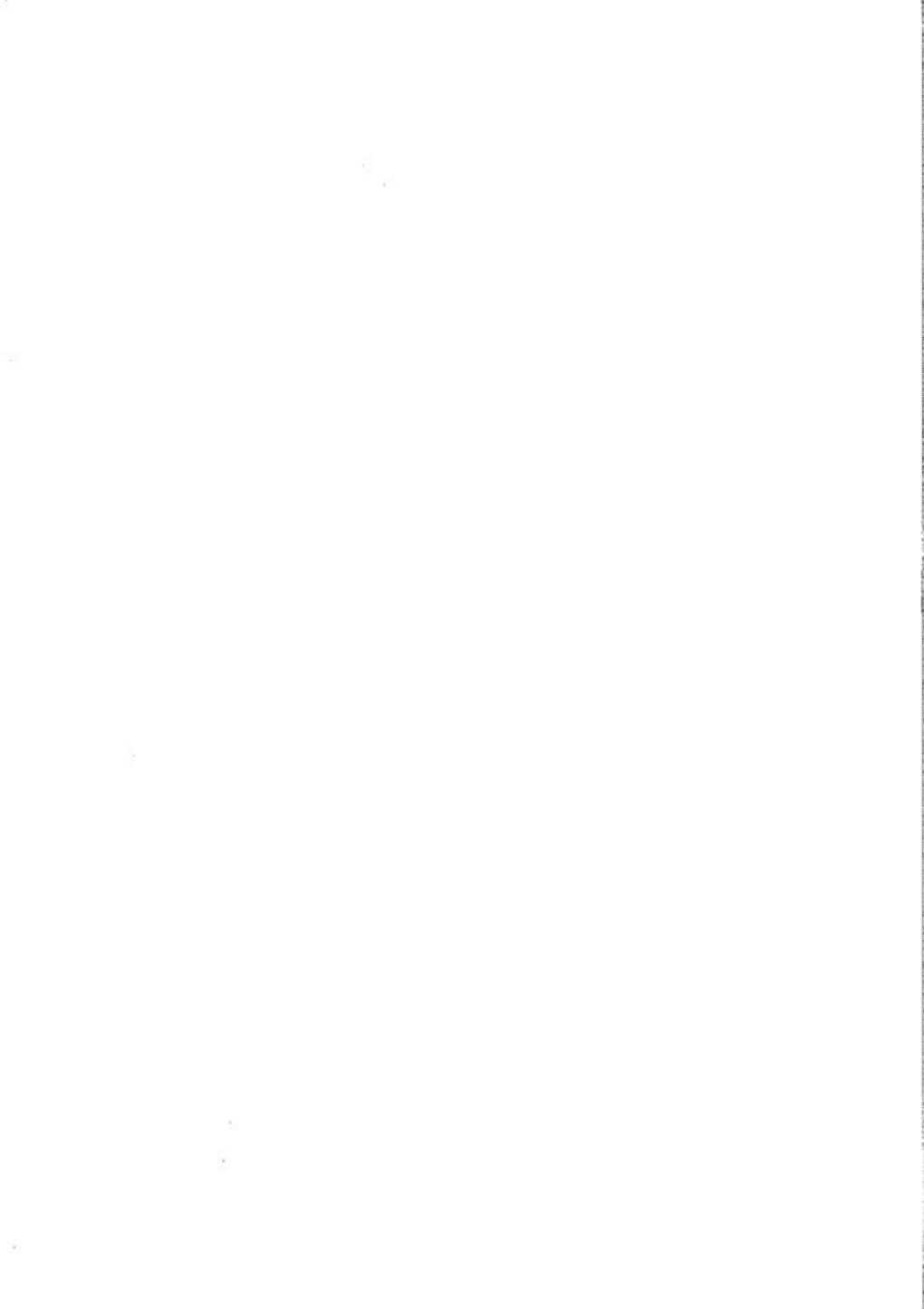
松山市教育委員会	教育長	池田尚郷
生涯教育部	部長	渡辺和彦
次	長	渡部泰輔
次	長	三好俊彦
文化教育課	課長	松平泰定
松山市生涯学習振興財団	理事長	田中誠一
	事務局長	一色正士
埋蔵文化財センター	所長	河口雄二
次	長	田所延行
	調査係長	田城武志
調査主任	調査主任	栗田正芳(文化教育課職員)
調査担当	調査員	相原浩二
"	"	河野史知



第II章

古照遺跡

—第10次調査—



第II章 第10次調査の概要

1. 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

平成2年10月29日、松山市都市整備部公共下水道課より松山市南江戸4丁目1-1に所在する松山市下水道中央処理場(現、松山市下水道中央浄化センター)内における施設工事予定地の埋蔵文化財確認願いが松山市教育委員会文化教育課に提出された。

申請地は、汚泥濃縮タンク、汚泥消化タンク、汚泥消毒タンク、ガスホルダー、連絡管廊、地下連絡通路、分配槽の各施設予定地である。これら各施設の中で汚泥消化タンクと汚泥消毒タンク予定地は、平成3年度に古照遺跡第7次調査として発掘調査を実施した。

平成4年3月9日から同年3月21日にかけて、(財)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター(以下、「埋文センター」という)が他の施設予定地について確認調査を実施した。

施設予定地の中で特に、地下連絡通路予定地では、洪水で埋没した水田遺構を2面確認、更にその下層から遺物を出土した。この結果を受けて、文化教育課と下水道建設課(平成4年度、課名変更)と埋文センターの三者が発掘調査の協議を行った。

発掘調査の対象となる深さは、工事基底面までとなる。しかし、中央部分の工事基底面が一番深いが、平成5年度中が工事の終了予定であるため、この中央部分については工事掘削段階の立会調査となる。

発掘調査は、平成4年度の古照遺跡第9次調査(地下連絡通路予定地の西側)の調査結果も踏まえて古墳時代(5世紀前半)の遺構を主目的として、平成5年度に埋文センターが主体となり実施した。

なお、調査委託者は平成5年度の市機構改革により下水道部下水道建設第1課による。

(2) 調査組織

調査地 松山市南江戸4丁目1-1、地下連絡通路
遺跡名 古照遺跡第10次調査
調査期間 屋外調査：平成5年(1993)4月1日～同年5月29日
調査面積 830m²(対象面積約1,408m²)
調査委託 松山市下水道部下水道建設第1課
調査担当 調査員 栗田 正芳
調査員 小笠原善治
調査作業員 錦出 謙二・田丸 電馬・上野山志保・遠藤久仁子・岡市 美紀・
岡田 久子・岡田 弥生・菅 摩理・白形 安子・白玉 典子・
関 正子・竹村 志津・多知川富美子・谷口よし子・西島 優子・
常廣 一恵・乗松 和枝・萩野ちよみ・藤田 調子・矢野 久子・
山本 仁美・横田三都子・吉井 信枝 ほか

(3) 調査の経過

第10次調査地は、第6次調査地の北東にあり、第9次調査地の東側隣接地であり、幅約13.8m、長さ約102mと南北に細長く対象面積は約1,407.6m²である。

調査地は、工事車両道路として中央を分断されているため、まず車両道路の南側部分を調査し、次に北側部分の調査、最後に工事車両道路を北側に移して残りの中央部分の調査の三回に分けて行われた。そのため、調査中、便宜的にA・B・Cの三区の名称を設定し使用する。

調査は、まず工事対象の深さまでを対象とするため、地表面から約3m下が対象範囲で南北の両端は更に浅く地表面から約1mが対象範囲である。中央部分の工事基底面は、現地表面から約7m弱下がるが、工事工程上、現地表から約3m下を調査範囲とする。その下層部は、工事掘削段階に立ち会い調査を行う。

調査方法は、現地表面(標高約13.10m)より深さ3m下がるため、乗り勾配を考慮して調査地の壁面は2段掘り(階段状)とする。

調査基準グリッドは、第6次調査と同様の磁北に合わせた6mグリッドを使用する。

平成5年4月2日より、調査地南側部分の掘削を重機により開始する(A区)。掘削の深さは、南端で約2m、北端で約3mである。調査地は全域に砂礫層が堆積している。調査地の北東隅で黒褐色粘質土を部分的に確認したためその部分を深く掘り下げ土層図を作成する。この調査地は平成5年4月14日に終了する。

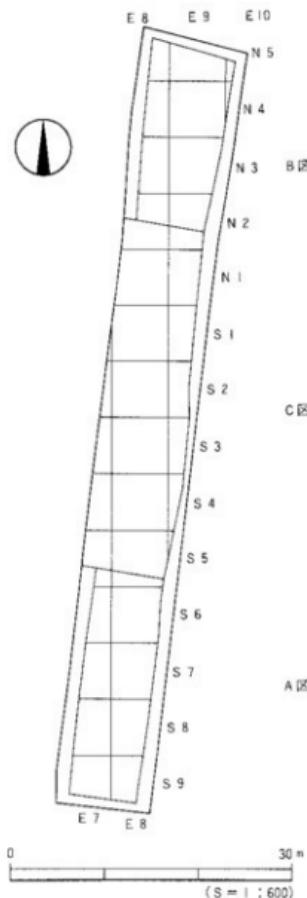
予定地の北側部分(B区)の掘削を平成5年4月14日から開始する。調査区の南側部分で、第9次上層調査で検出された黒褐色粘土層を検出する。この黒褐色粘土層の北端で平安時代

の溝を検出し遺物を出土する。黒褐色粘土層より北側は砂礫層が堆積している。この砂礫層の一部を除去すると砂礫層から須恵器片を出土する。砂礫層下の黒褐色粘土層は、河川の流路または洪水による洗掘の痕跡と思われる小溝群が南東から南西方向にかけてみられた。この洗掘痕跡の全容は調査できていない。この調査地は平成5年5月17日に終了する。

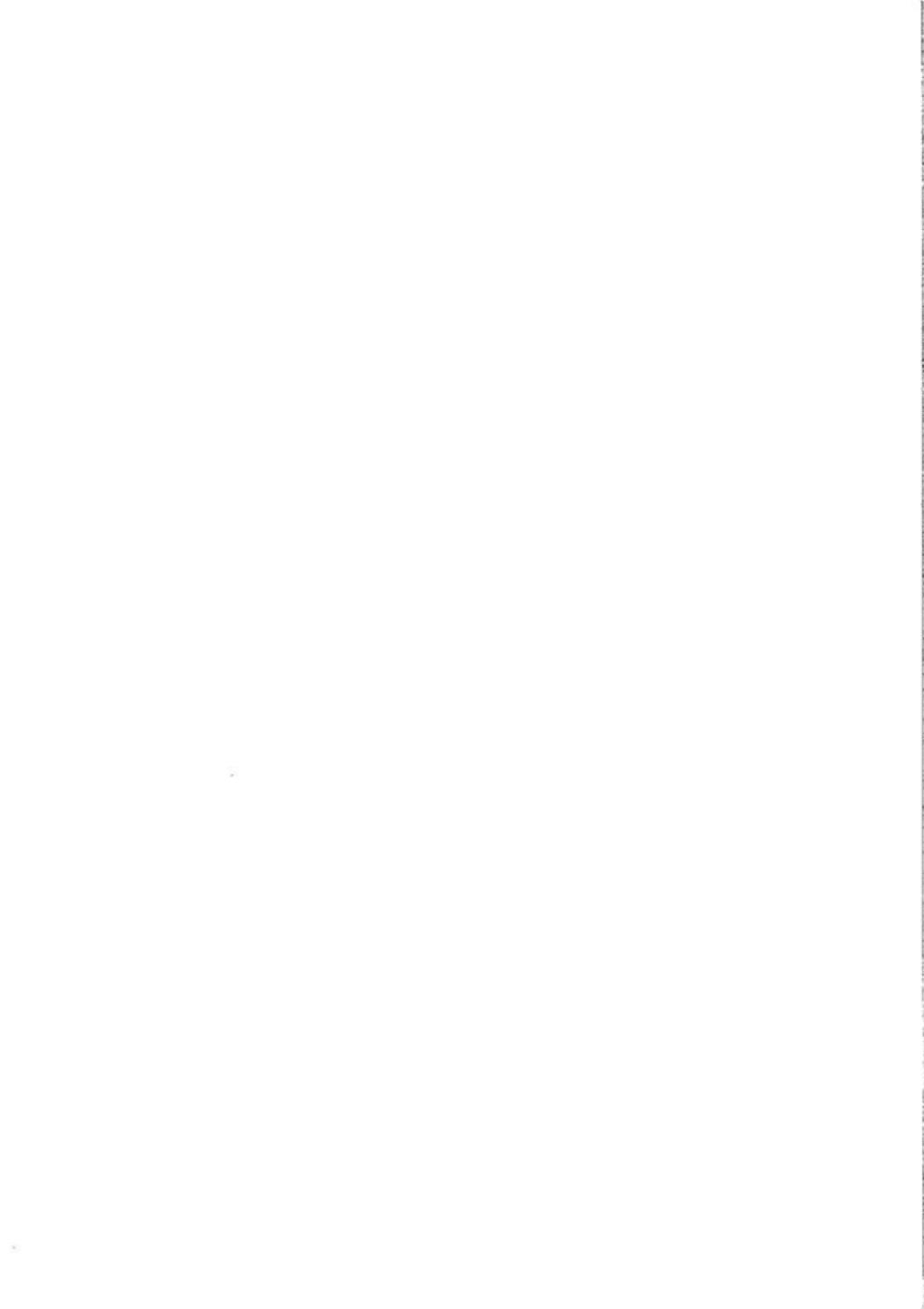
予定地の中央部分(C区)は、平成5年5月21日から掘削を開始する。B区で検出された黒褐色粘土層を被覆する灰色~灰白色等の細砂層(第III層)直上までを重機によって掘削し、以下は人力によって掘り下げを行う。結果、土師器の小型壺や甕、杭などを出土する。これら土師器は、第9次調査地で出土した河川祭祀にともなう土師器の東端部と思われる。この調査は、平成5年5月29日に終了する。

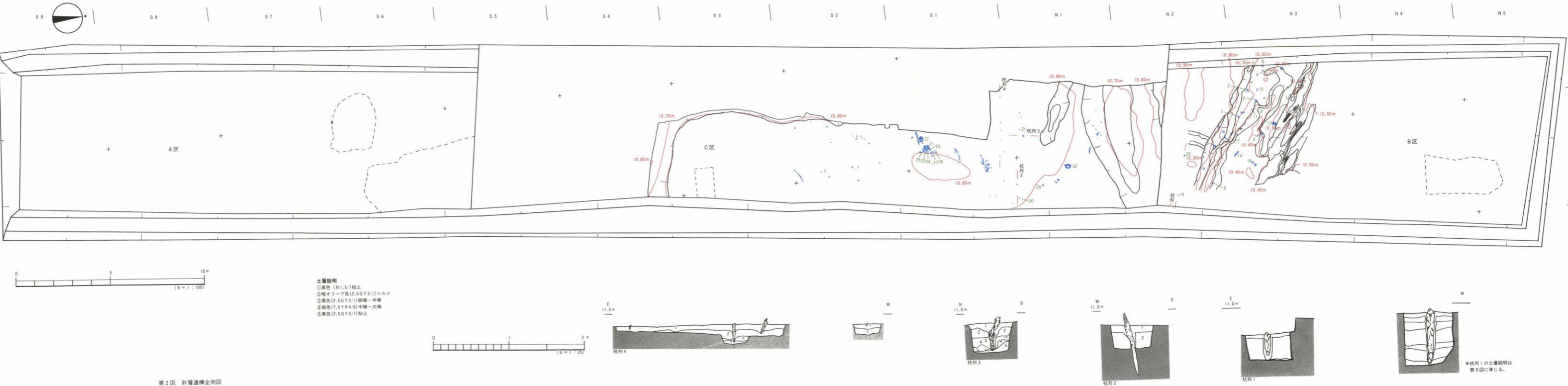
実質発掘面積は、南北約83m、東西約10mを測り830m²となる。

同年6月15日から、工事用の掘削がC区で行われる。重機による掘削中に立会調査を行う。調査層序以下には、砂礫層が厚く堆積しており、C区のやや南寄りで残塊的な黒褐色粘土を確認し、土器片を採集する。第9次下層調査で確認された古墳時代前期の黒褐色粘土層は確認できなかった。立会調査は同年6月22日まで行う。



第1図 調査地グリッド設定図





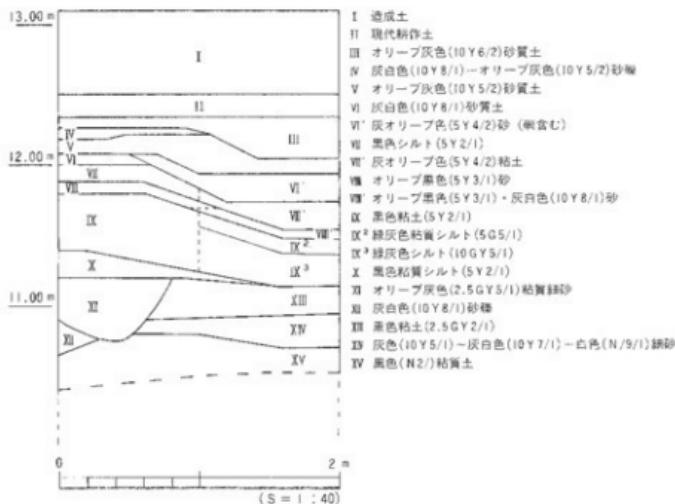
第 2 図 IV 層遺構全測図

2. 層位

本遺跡は、松山平野中央部を東から西に流れる石手川等によって形成された沖積平野にあり、特に扇状地の先端に立地する。

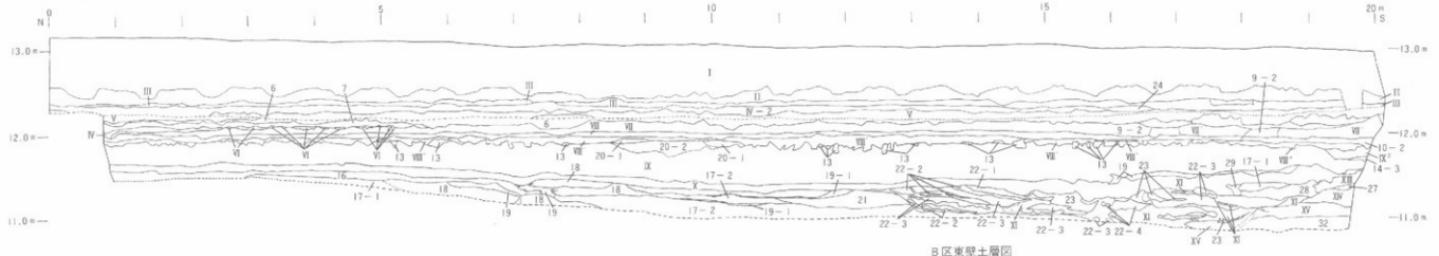
調査地の基本層位は、第Ⅰ層造成土、第Ⅱ層現代耕作土、第Ⅲ層オリーブ灰色砂質土(疊含む)、第Ⅳ層灰色～オリーブ灰色砂礫、第Ⅴ層オリーブ灰色砂質土、第Ⅵ層灰白色砂礫、第Ⅶ¹層灰オリーブ色砂(疊含む)、第Ⅷ層黒色シルト、第Ⅸ¹層灰オリーブ色粘土、第Ⅹ¹層オリーブ黑色砂、第Ⅺ¹層オリーブ黑色・灰褐色砂、第Ⅻ層黒色粘土、第Ⅼ¹層緑灰色粘質シルト、第Ⅽ¹層緑灰色シルト、第Ⅾ層黒色粘質シルト、第Ⅿ層オリーブ灰色粘質細砂、第ⅰ層灰白色砂礫、第ⅱ層黒色粘土である。

第Ⅰ～Ⅺ層は地表下70cm～80cmまで開発が行われている。第Ⅻ層は調査区全域にみられ、南に広がるにつれやや厚くなる。第Ⅿ層はB区からC区にかけて消滅する。第ⅰ層は、調査区全体にみられ、B区からC区にかけて一時にやや厚く、南にやや下がって薄くなる江戸期の遺物を包含する水田跡である。第ⅱ層は、調査区全体にみられるが、南に厚くなる。また、この層はオリーブ灰色から灰オリーブ色砂(疊含む)へ変わる。第ⅲ層は厚さ10cm～20cmの堆積で、調査区全体にみられ、南部では下がり厚くなる。江戸期の遺物を包含する水田跡



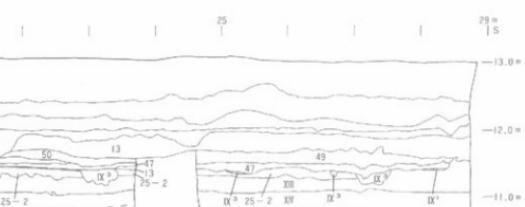
第3図 基本層位図

A区東壁土層図



B区東壁土層図

第4図 調査区土層図



C区東壁土層図

である。第Ⅶ層は厚さ10cm前後の堆積で、調査区全体にみられ南部で下がる。この層は、B区からC区にかけてオリーブ黒色砂からオリーブ黒色・灰褐色砂に変わる。第Ⅸ層は厚さ40cm～50cmの堆積で、調査区全体にみられる。この層は、調査区北部では黒色粘土を示すが中央から南部にかけて緑灰色粘質シルトを上層とし、緑灰色シルトの層に変わると13世紀代の水田跡である。第X層は、厚さ20cm前後の堆積で調査区北部からみられ、中央部で消滅する。この第X層及びIX層の基底面は、ほぼ水平に堆積している。第XI層はSDの埋上で、第XII層上面より掘り込まれ、灰白色粗砂・中硬による互層堆積がみられる。第XIII層は、第XII層につながるものと考えられ、SD1を境に灰白色砂礫から灰色～灰白色～白色細砂に変わる。第XIV層は、厚さ20cm～30cmではほぼ水平に堆積する。第XV層は、厚さ10cm～25cmの堆積でSD1に切られ、南部に下がりながら厚くなる。第XVI層は、厚さ10cm～30cmの堆積である。この層より土師器の壺、小型壺等が整然と並べられた状況で出土している。

以上の上層観察から、第V・VI層の江戸期の水田跡、また第X層の13世紀代の水田跡や第XIV層の古墳時代中期前半の水田跡等の検出がされているが、いずれの水田跡も洪水等によつて埋没している。これらの水田跡の規模等は現時点ですべては把握されていないが、本調査地以東・以南に広がる事が分かる。さらに、第X層を境に上層はやや南部に低く、下層は第XIV層を基底とし南部に微高地が形成される事が理解される。これにより当該期において本調査地は低地から微高地に推移する状況を捉える事ができた。

注)上色の色調は、「標準土色帖」1989年版による。

3. 遺構・遺物

調査区全体は、南北に細長く幅10m、全長83mを測る。調査工程の都合によりA・B・Cの3区に分けて調査を行った。また、C区は、古照遺跡9次調査に東接する調査区である。

本調査において検出された遺構は、B区では溝状遺構1条、杭列、C区では古照遺跡9次調査地に続く、河川に伴う祭祀土器群の東限域及びそれに伴う杭列が確認された。

(1) A区 出土遺物(第5図)

1は高環の脚部のみである。接合部から直線的に開き緩く屈曲して裾部へと続き、端部はまるくおさめる。底面は裾部端において水平をなす。環部との接合は、円筒状の脚柱部を环底部に挿入する方法と思われる。外側の調整は摩滅のため不明である。内面は脚柱部はナテ調整、裾部は摩滅のため不明である。底径11.6cm、残存高6.8cmを測る。

(2) B区 溝状遺構

S D 1

B区において確認された溝状遺構1条は、調査区の南側東西方向の溝で東から西に向かってやや幅広を呈し、調査区外に延びる。規模は最大幅約6m、深さ40~80cmを測る。遺構はX層上面にて検出した。断面は皿状を呈し、埋土は第XI層(オリーブ灰色粘質細砂)を主とし、灰白色粗砂、中疊による互層堆積が見られる。この堆積中には、牛の足跡が多数検出されている。溝底面の東西における比高差は余りない。また、この遺構から黒色土器、土師器、竹製品、桃実等が出土している。

S D 1 出土遺物(第5図、第7図、第8図)

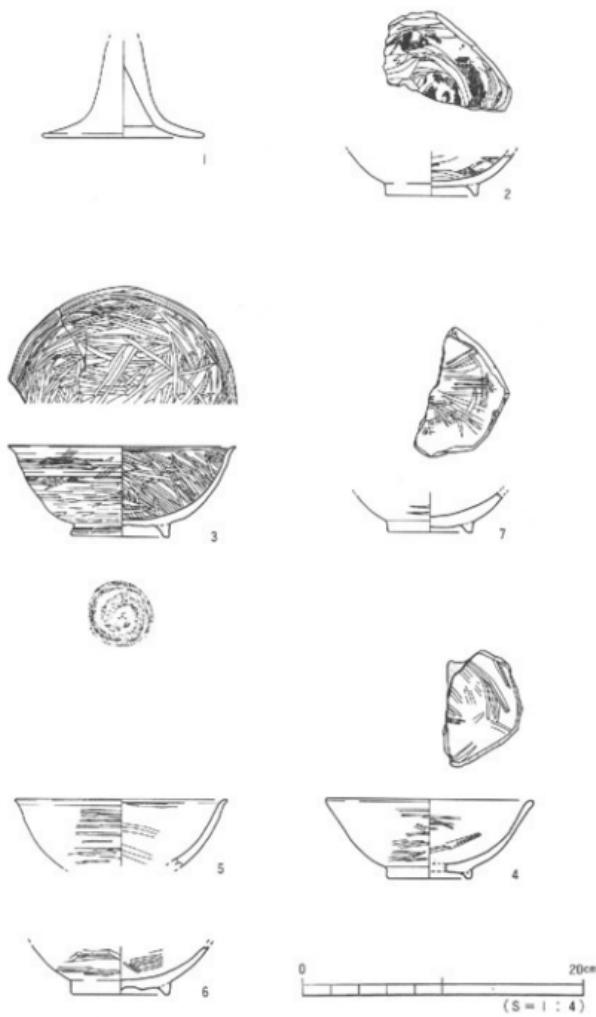
2、3はいわゆる黒色土器A類の内黒椀である。2は、丸底を呈する底部に断面三角形の高台が貼り付けられた後、ナテられている。見込み部にはハケ日の後に磨きが施されている。高台高0.8cm、復元高台径6.4cmを測る。

3は、ほぼ完形品でやや腰の張る器形である。口縁は外反し、体部外面は横方向の磨きが緻密に施され、体部内面は横方向の磨きや見込み部から口縁部にかけて斜め方向の磨きが施されている。底面はヘラ切りされ、断面台形状の高台が貼り付けられている。底面のヘラ切り方向は時計回りである。口径16.2cm、底径7cm、器高6.7cm、高台高1cmを測る。

4は、黒色土器B類の椀である。底部と口縁部は接合しないが同一個体と思われる。口縁は外反し、内外面とも磨きが緻密に施されている。底面は、円盤状高台の外周に断面逆台形の厚手高台が貼り付けられる特徴がある。復元口径14.8cm、底径6cm、器高5.7cmを測る。

5と6は同一個体と思われる黒色土器A類の内黒椀である。5の口縁部は外反し、6の内面には小さな窪みが多数見られ何らかの痕跡であろう。復元口径15cm、底径6.8cmを測る。

7は、黒色土器A類の内黒椀である。器壁はやや厚く、断面台形状の高台が貼り付けられ、



第5図 A区・B区SD I出土遺物実測図

見込み部には放射状の磨きと横方向の磨きが施されている。底径5.8cm、高さ0.5cmを測る。

8、9は、土師皿である。8の口縁は外反している。復元口径8.8cm。9は、底部からやや内湾気味に立ち上がり、底面は回転ヘラ切りである。復元口径9.8cm、器高2.1cmを測る。

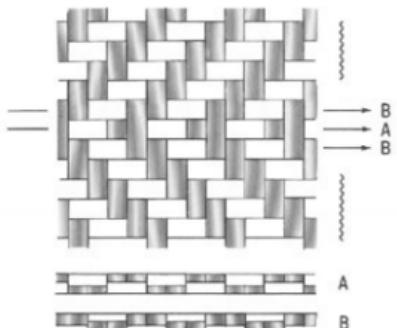
10は、土師器环で底面は回転ヘラ切りされている。体部外面上半分はヨコナデが施され下半分は未調整である。口径14.4cm、底径8.2cm、器高3.7cmを測る。

13は、幅8mm~9mm、厚さ約2mmの薄い部材を絹糸と絲糸を交互に編み、斜め短冊状に組合せ模様を造る、網代編みによるものである。力竹様の物は、二つ越えて二つ潜る(A)。他は、一つ潜って2つ越えて1つ潜り1つ送るを繰り返す(B)。いわゆる綾編みの一つである。

この力竹様の物を中心にして上下にBパターンを同様に編み、「く」の字状の綾編みが作られている。(第6図) 線仕上げは、楕円形の芯材2本を合わせ、胴部と同様な薄い部材で巻いて仕上げる。原形状は不明であるが、用途は籠状の物を想定している。

14の杭は幅5.9cm、残存長33.9cmを測る芯持ち材を片面のみ削りだし、断面は方形を呈している。先端部は欠損する。

15は幅2.5cm、残存長13.8cmを測る。3方向から削り出され、断面や形状の観察から杭材の剥落と考えられる。



第6図 篠状遺物モデル図

用途不明品

16は1.6cm、残存長13.2cm、厚さ0.5cmの板目を使用し、断面形は長方形を呈する。断面形は半蒲鉾状で表面は丸く仕上げ、裏面は平坦に仕上げられ一側は面を持つ。

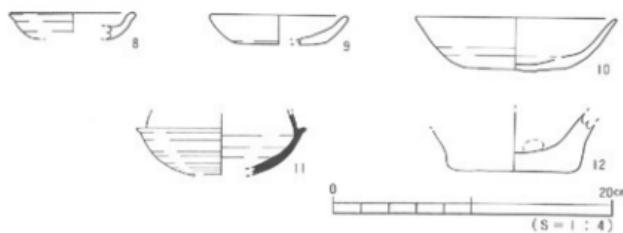
B区遺構外出土遺物(第7図、第11図)

11は、本遺跡中でただ1点出土上の須恵器环身片である。口縁部は内傾し、体部の1/2程度の範囲を回転ヘラ削りされている。口径、器高は不明。

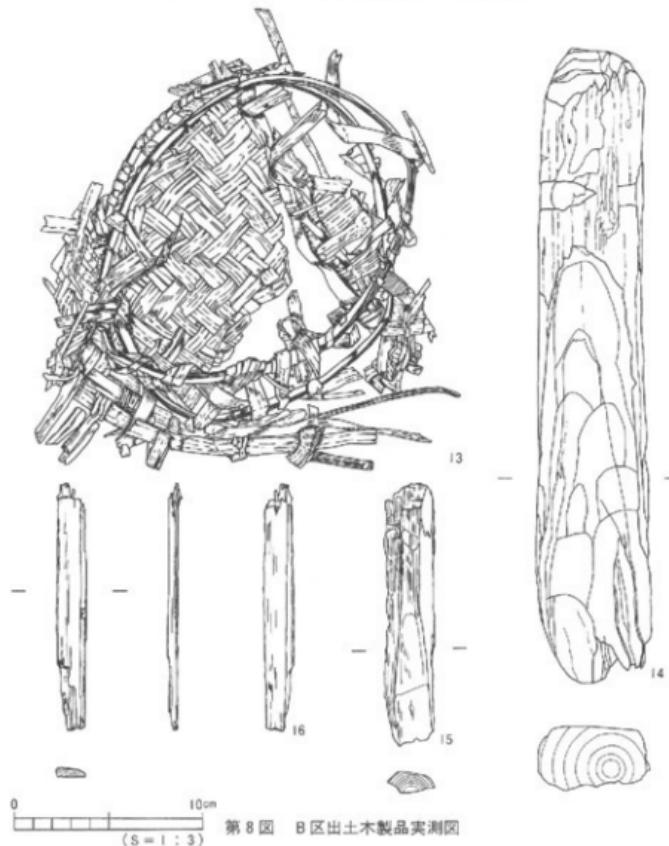
12は、底部から胴部に向かい、やや立ち上がりを持つ平底で、底径8.8cmを測る。

17は表面がかなり摩滅し、幅4.9cm、厚さ1.6cm、残存長9.4cmを測る板目材である。2方向から削りだし、先端は鋭角に切り落とされる。

18は幅2.4cm残存長14.9cm、厚さ0.9cmの柾目材を使用し、断面形は長方形を呈する板材である。両端部は火を受けている。



第7図 B区S.D.I及び遺構外出土遺物実測図

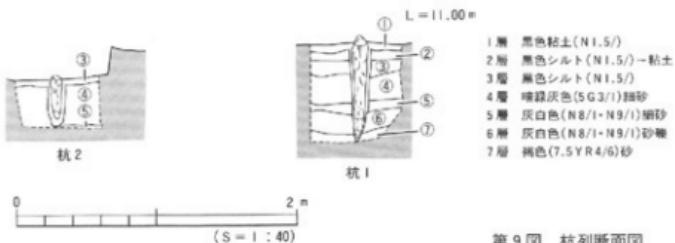


第8図 B区出土木製品実測図

(3) B区 杭列(第2図、第11図)

B区南部端において東西方向に杭列を検出した。これらは、杭材2本のみの検出である。溝状造構内からも杭材が出土しているが、観察によりこれらの断片とは思われない。

杭1(20)は、黒色粘土層より打ち込まれ、褐色砂まで達している。杭2(19)は、上部は欠失しているが比較的浅く、灰白色砂礫まで達している。これらの杭列は、断面観察より前述の溝状造構の埋没以降に設置されたと考えられる(第9図)。



第9図 杭列断面図

19は幅3cm、残存長26.7cmを測り先端部を削り出してある。

20の杭は幅8.8cm、長さ69.6cmを測る芯持ち材を4方向から削り出している。断面は多角形を呈し、先端は一方向から鋸角に切り落としている。

(4) C区 祭祀土器群(第10図)

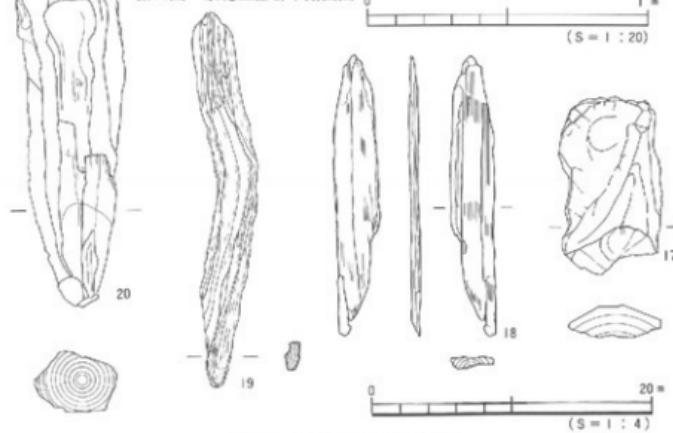
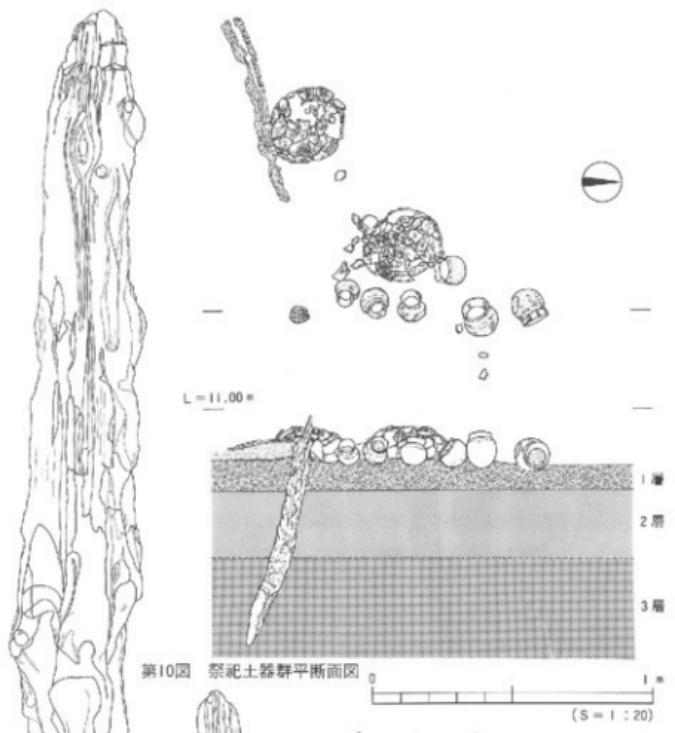
C区において検出された上器群は、調査区中央、古照遺跡9次調査地の祭祀土器群の東端に続く造構である。出土土器は彫形土器2個体、完形の小型壺6個体が(ほぼ南北に整然と並べられている。また、これらに伴って1m程度の杭が付設されている(第10図)。この状況から、何らかの河川に伴う祭祀が行われた可能性が考えられる。土器群下の層序は、第1層黒色粘土質(第1Y層)、第2層暗オーリーブ色シルト、第3層暗オーリーブ色微砂である。

これらは古照遺跡9次調査地出土上器群に含まれる為、詳細は「古照遺跡9次調査報告書」で述べる事とする。

出土遺物(第12図)

21、22は彫形土器である。21の口縁部は体部からゆるく屈曲し、外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は球形をなし、底部は丸底を呈する。口縁部外面はハケ目その後ナテ調整、内面はハケ目が施される。体部外面はハケ目調整、内面は底部から頸部下にヘラ削りが施され、底部に指頭痕がみられる。口径15cm、頸部径12.4cm、器高27.8cmを測る。

22の口縁部は体部から「く」の字状に屈曲し、外傾して立ち上がる。端部は丸くおさめ、平面形は梢円形状を呈する。体部はややいびつな球形をなし、底部は丸底を呈する。口縁部は内外面ともハケ目その後ナテ調整。体部外面はやや荒いハケ目調整、内面はヘラ削り後ナテ調整が施されている。内外面とも指頭痕がみられる。口径は18.1cm、器高28.8cmを測る。



第11図 B区出土木製品実測図

23, 24, 25, 26, 27, 28は完形品の小型壺である。23は、やや平底気味の底部をもち、頸部で緩く外傾し口縁部は薄くおさめる。外面、頸部から口縁部にハケ目調整の後、ヨコナデが見られる。内面は荒いナデ調整がみられ、指頭圧痕が内外面に認められる。

24は、尖底気味の底部でやや肩が張り、最大径は胴上部に持つ。内面は口縁部にハケ目を施し、胴上半はヘラ削り、下半はナデられ指頭痕が見られる。外面はハケ目の後ナデられ、胴部中位に多く指頭痕が見られる。口径は8.7cm、器高9.9cmを測る。

25は、体部が球形状を呈し、頸部の指頭によるくびれは小さく、口縁部は短い。内面は頸部及び口縁部にヨコナデ、体部は渦巻状(時計回り)にナデ上げられている。特に頸部に指頭痕が多くみられる。外面は頸部に指頭による調整の後ヨコナデ、体部から底部はナデされている。口径は9.6cm、器高は9.0cmを測る。胴部内面には粘土紐の継ぎ目が見られる。

26の底部は荒く、ほとんど未調整である。体部はやや扁平な球形を呈し、口縁は外傾して立ち上がり、頸部は指頭によりくびれが造られる。内面は頸部から口縁端部にハケ目の後ヨコナデ。底部から体部にかけて放射状に荒くナデ上げられている。外面は、口縁部にハケ目の後ヨコナデ。体部はナデされている。口径は7.4cm、器高は8.9cmを測る。胴部内面には粘土紐の継ぎ目が見られる。

27の口縁部は短く内弯気味に立ち上がり、端部は丸くおさめやや薄い。体部は球形を呈する。内面頸部下と外面頸部に継ぎ目が観察できる。口縁部は外面ともヨコナデ。体部外面は摩滅しているがわずかにハケ目が見られる。内面は底部から頸部下までナデ上げられる。口径12.7cm、器高12.3cmを測る。

28のやや厚い口縁部は、体部から緩く外傾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。体部は球形を呈し、底部は丸底でやや荒い仕上げである。内外面の頸部に継ぎ目がみられる。口縁内外面はハケ目の後ヨコナデ。体部内面は底部から頸部下までナデ上げられている。外面は胴部下位までハケ目が施され、底部はナデされる。口径10cm、器高13.2cmを測る。

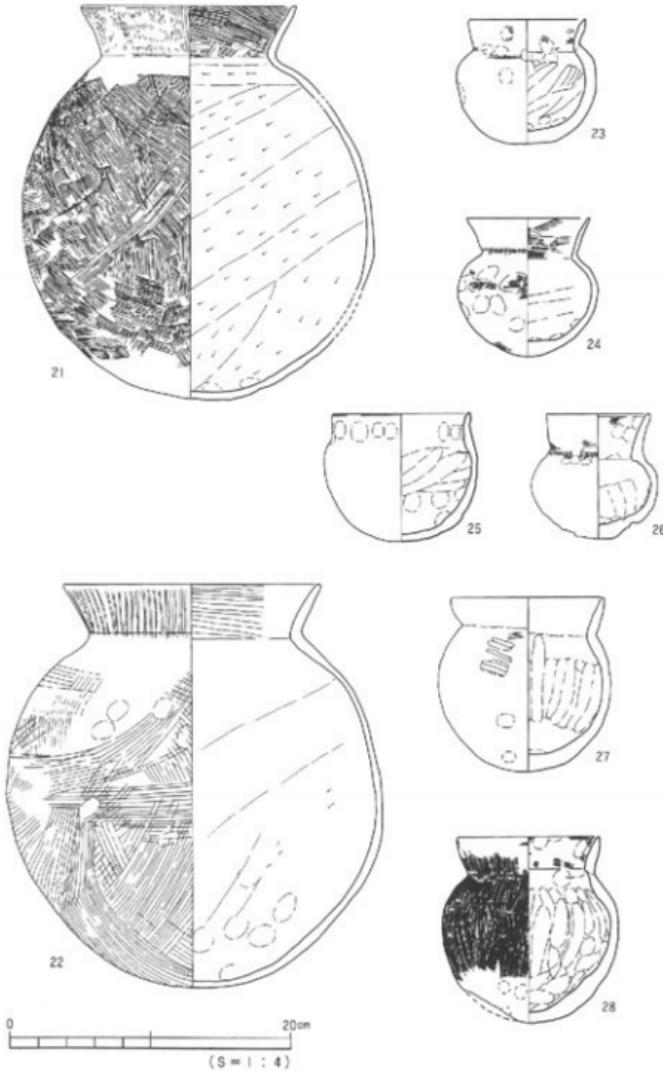
その他の出土遺物（第13図）

C区においては、祭祀土器以外に高環、甕が出土しているが遺構に関わるものではない。

29, 30, 31は高環である。29は、1/6程度残存する環部片である。水平に伸びる环底部から外傾して立ち上がり、短い口縁部へ継ぎ端部は丸くおさまる。また、外面环底部と口縁部の境に稜を持つ。外面ともヨコナデにより仕上げられている。復元口径15cm、环部残存高4.5cmを測る。

30は、高环脚部のみの残存である。脚柱部は、中膨らみ気味で屈折して環部へと続く。外面ナデ、内面脚柱部はヘラ削り、裾部はナデされている。底径16.7cm、残存高7.4cmを測る。

31の环部及び脚部は同一個体と思われる。内弯した环底部から外傾して立ち上がり外反する口縁部に続く。端部は器面摩滅のため不明。环底部と口縁部の境に稜を持つ。脚柱部は直線的に開き、屈折して環部へと続く。环部と脚部の接合法は、环底部外面に环底部と一体の



第12図 祭祀土器群実測図

突起状痕が見られ、環底部にいわゆる枘を作り出すものと考えられる。調整は内外全面磨滅のため不明であるが、據部内面にハケ目痕がわずかに認められる。口径15.3cm、環部器高5.9cm、船底径10.7cmを測る。縁部から脚上部に、二次焼成を受けた部分が看取できる。

32は、彫形土器である。口縁部はゆるく屈曲し外傾して立ち上がる。端部はやや肥厚し丸くおさまる。体部は卵型をなし底部は丸底を呈する。頸部内外面に指頭痕がみられる。口縁部は内外面ともハケ目調整、頸部外面はヨコナテ調整が施され、体部内面上半はハケ目の後ナテ調整、下半はヘラ削りが施される。外面はハケ目調整が施される。

(5) 調査区外出土遺物(第13図、第14図)

33、34は高環形土器である。33はA区西側の工事掘削中により出土している。水平にのびる環底部から屈曲して内弯気味に立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。環底部と口縁部との境は明瞭な棱となっている。端部は丸くおさまる。環底部には短い突起とその周間に枘状のへこみがみられる。外面ともヨコナテ調整が施されている。底部内面に僅かにハケ目痕が認められる。口径14.4cm、残存高6.2cmを測る。

34は調査区下層の排土より出土している。脚部のみの残存で、據部は欠損している。脚柱部はやや外反して聞く。脚柱部に4ヶ所円孔が焼成前に穿たれている。外面調整は磨滅により不明。内面は円孔部上半に工具状のものでナデられ、下半はハケ目調整が施されている。

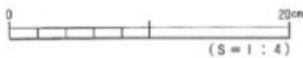
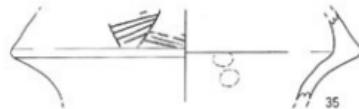
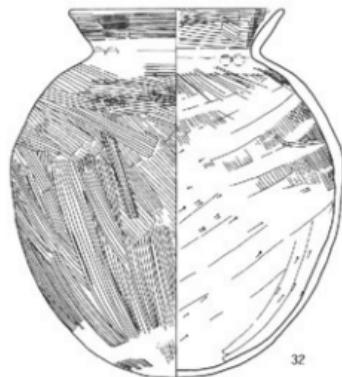
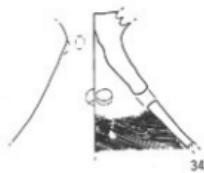
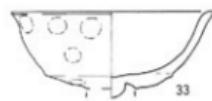
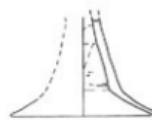
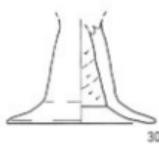
35はA区砂礫層排土より出土上の壺形土器である。複合口縁壺の口縁部片で、口縁接合部が「く」の字状を呈し、稜は鈍く丸みがある。口縁拡張部にヘラ描きによる、規格模様が施される。外面は磨滅により不明、工具及び手指によるナテが施される。約1/8の残存である。

36、37は支脚形土器である。36は、調査区下層の排土より出土している。「犬埴輪」タイプの中空の支脚で、胴部から底部は欠失する。上端の支手部は2本の角状に突出し、突出側とは逆の体部を把手状に僅かに摘み出しているのが特徴的である。支手下部に貼り付け痕が見られる。外面はナデられている。

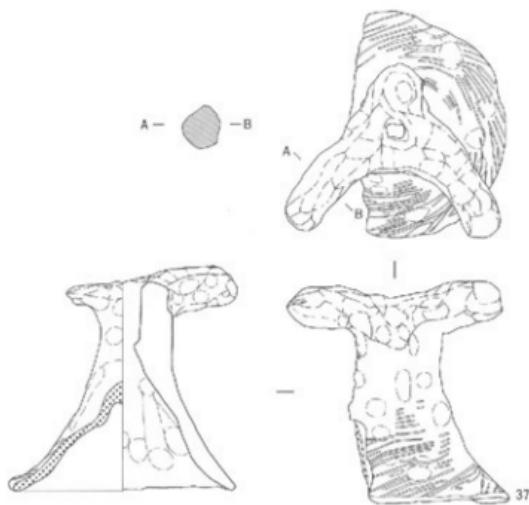
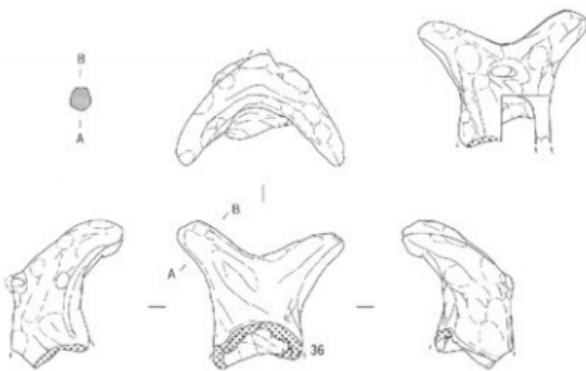
37は調査区下層排土より出土している。胴部から裾部にかけて一部欠失する。28と同じ「犬埴輪」タイプだが、体部が中空で上方に突き抜け、棒状の支手が水平に伸び、先端は丸くおさめる。背後は支手と同位置に把手状の突起が貼り付けられている。支手、及び把手の接合痕が見られる。体部上半はしばりによって成形される。外面は体部から襟部はタタキ目、他はナテ。内面はナテ調整が施される。器高15.8cmを測る。本道跡及び関連遺跡でも、この「犬埴輪」タイプの出土は多く見られるが、37はやや異なる部分が見られる。

まず、体部から伸びる支手の角度がほぼ水平である事、また支手の断面が多角形またはやや丸い方形を呈する。これらは、この犬埴輪タイプの中でも余り見かけられない物である。また、断面が多角形もしくはやや丸みを持った方形は見られたとしても、体部に対して支手が水平に伸びるこの手のタイプが見られるのは少なく、数としては少数派である。

第15図の38は、愛媛県越智郡朝倉村「朝倉南甲遺跡」出土の支脚。39は松山市「樽味立添遺



第13図 C区及び調査区外出土遺物実測図

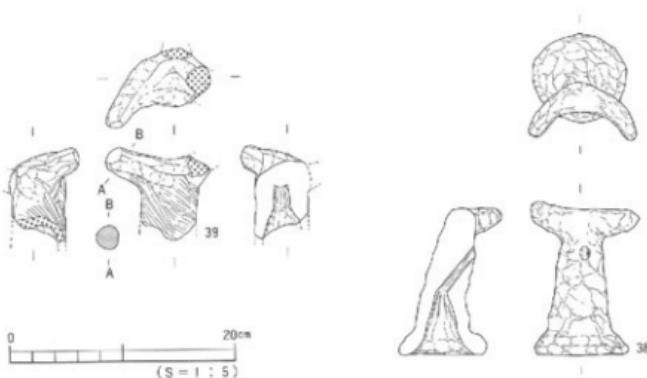


第14図 調査区外出土遺物実測図

跡出土の支脚である。38は体部下半が中空で、頭部に近い部分は中実になっている。頭部では左右の前方にやや短い角状の支点が設けられている。体部の上位には楕円形の孔が設けられており、脚底内面まで貫通している。手法的には、指頭押圧による成形の後、体部の穿孔、角状支点の張り付けがなされている。器高16.3cm、脚底部10.0cmを測る(谷若、1986)。

39は、受け部に短い2本の支手が設けられ、背後に小さい把手が付けられる。下部は欠失している。支手の断面形は多角形をなす。これらは、中空・中実の相違、背後の把手の有無はあるが、支手の形状及び体部に対しての角度については近似する形態の物と考えられる。

体部に対する支手の角度は、支脚による煮沸形態を考える上でも、考察されるべき1つの視点ではないだろうか。



第15図 樺味立添遺跡・朝倉南甲遺跡出土遺物実測図

【参考・引用文献】

- *栗田正芳・河野史知他「古照遺跡-第6次調査-」松山市教育委員会・鴨松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター 1993
- *栗田正芳「古照遺跡-第7次調査-」松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター 1994
- *梅木謙一・宮内慎一「櫻味立添遺跡」「桑原地区の遺跡」松山市教育委員会・鴨松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター 1992
- *相田則美・谷若倫郎「出作遺跡I」松前町教育委員会 1993
- *谷若倫郎「朝倉南甲遺跡」朝媛媛埋蔵文化財調査センター 1986
- *福岡市教育委員会「吉塚1号墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第202集 1989
- *中村貞司「弥生時代における旋形土器の煮沸方法と熱効率」『考古学雑誌』第73巻 第2号 1982
- *佐藤庄五郎「国説竹工芸」 1986



第三章

古 照 遺 跡

—第11次調查—



第III章 第11次調査の概要

1. 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

平成5年11月17日、松山市下水道部下水道建設第3課(以下「下水道建設第3課」という)課長より、松山市南江戸4丁目1-1の松山市下水道中央浄化センター(以下「浄化センター」という)内における下水処理施設建設工事に伴う埋蔵文化財確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下「文化教育課」という)に提出された。

申請された建設予定施設は、浄化センター施設内でも西端にあたる汚泥消化タンクである。当地は松山市の指定する埋蔵文化財包含地の「No35古照遺跡」内にあたり、過去の調査において中世遺跡の存在が明らかにされている。特に当調査地東隣には、主に中世段階の農耕遺構や墓域を検出した古照遺跡第7次調査地A地区が位置する。

平成6年8月18日、申請地の試掘調査を実施した。2ヶ所のトレンチ堀りを行った結果、標高約11mより中世段階の土師器片が出土し、その下層において第7次調査地A地区で検出した中世水田跡のつながりと考えられる層が確認された。

試掘調査の結果を受け、下水道建設第3課と文化教育課並びに松山市埋蔵文化財センターとは汚泥消化タンクの工事を着手するにあたり事前の埋蔵文化財発掘調査について協議を行った。屋外調査は第7次調査地A地区で検出した中世水田跡のつながりを主目的として同年9月1日から開始する。

(2) 調査組織

調査地 松山市南江戸4丁目1-1、汚泥消化タンク

遺跡名 古照遺跡第11次調査

調査期間 屋外調査：平成6年(1995)9月1日～同年11月22日

調査面積 364.46m²(対象面積750m²)

調査委託 松山市下水道部下水道建設第3課

調査担当 調査員 相原 浩二

調査員 河野 史知

調査作業員 山邊 進也、岡本 克司、相原 勇、池田 平、宇都宮東吾、田中 黙、
二宮 和見、西田 竜一、西原 義法、向井 大作、篠崎 正記、久保 浩二、
前田 伸哉、松本 幸正、松友 利夫、藤田美恵子、真木 雅子、高尾 久子、
金子 育代、仙波 千秋、仙波ミリ子、猪野美喜子、乗松 和枝、種子田千津子

ほか

(3) 調査の経過

11次調査地は、第7次調査地A地区の西側隣接地である。工事対象は南北約26m、東西約27m、面積約750m²である。調査区は、磁北に合わせて6mグリットを設定した(第1図)。平成6年9月1日、調査区南東端から重機により第II層現代の耕作面までの掘削を開始する。

同年9月5日、重機による掘削を終了する。東西南北壁、壁際にトレーニング掘りを行う。

同年9月6日、南壁より壁面精査し、土層図を作成する。

同年9月13日、ミニユンボにて東側より第VI層上の砂層上面まで掘削を開始する。併行して第VI層上面の遺構検出作業を行う。

同年9月16日、ミニユンボによる掘削を終了する。

同年9月19日、調査区内にグリット杭打ちを行う。

同年9月20日、第VI層、遺構検出状況の写真撮影を行う。

同年9月21日、調査区西端より歯・足跡状遺構内の堆積砂の除去を開始する。

同年9月22日、遺構の測量を開始する。

同年10月3日、歯・足跡状遺構の完掘を終了する。

同年10月4日、第VI層遺構完掘状況の写真撮影を行う。

同年10月5日、調査区内にベルトを設定し、ミニユンボにて東側より第VI層の掘削を開始する。

同年10月20日、第VII層、遺構検出状況の写真撮影を行う。第VII層SK1、第VII層足跡掘り下げ開始。

同年10月26日、グリットベルト撤去開始。

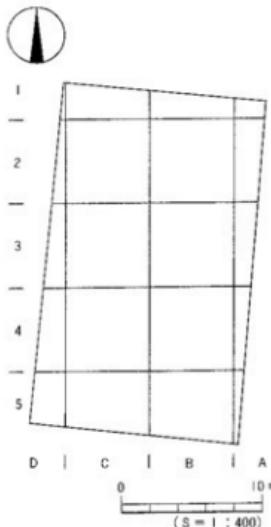
同年10月27日、第VII層、調査区南西部より柱穴状遺構の半截を開始する。

同年11月7日、第VII層、柱穴状遺構の全掘を開始する。

同年11月10日、第VII・VIII層、遺構完掘状況の写真撮影を行う。

同年11月11日、測量作業開始。

同年11月22日、現場作業終了。



第1図 グリット設定図

2. 層 位

調査区は、標高12.60～12.80mに立地する。調査区の土層図は4面のうち、比較的擾乱されてない東壁のみを作成した。

第Ⅰ層は現代の造成土並びに擾乱であり、約1.5m前後を測る。第Ⅱ層は現代の耕作土であり、層厚約15～20cmの堆積、第Ⅲ層は、層厚約10～20cmの堆積、第Ⅳ層は、層厚約20cmを測り調査区南東部にだけ堆積がみられる。第Ⅴ層は砂の堆積層で層厚約5～15cmを測り、調査区北東部にやや厚く堆積している。第Ⅵ層は砂質土で層厚約10～25cmを測り全体に堆積しており、上面において鉄跡状遺構を検出している。第Ⅶ層と第Ⅷ層の間に東壁では検出されてないが、B・C-4・5グリットを中心にして第Ⅷ層の青灰色砂質土が層厚約10cmの堆積でみられ、上面において掘立柱建物、土坑、柱穴状遺構を検出している。第Ⅸ層のシルト上面において足跡状遺構を検出した。

* 第2図 上層説明*

第Ⅰ層：造成土・擾乱土

第Ⅱ層：現代耕作土

第Ⅲ層

a層：オリーブ灰色シルト(10Y6/2)

b層：灰色シルト(7.5Y5/1)

c層：暗緑灰色砂質土(2.5G Y4/1)

第Ⅳ層

a層：灰色シルト(7.5Y5/1)粘性強

b層：明緑灰色砂質土(7.5G Y7/1)

c層：緑灰色砂質土(10G Y6/1)

第Ⅴ層

a層：灰白色細砂(N7/0)

b層：浅黄色粗砂(5Y7/4)

c層：V-b層にVI-a層混

第VI層(上面において鉄跡状遺構を検出)

a層：緑灰色砂質土(10G5/1)

b層：暗緑灰色砂質土(5G4/1)

c層：暗オリーブ灰色砂質土(2.5G Y4/1)

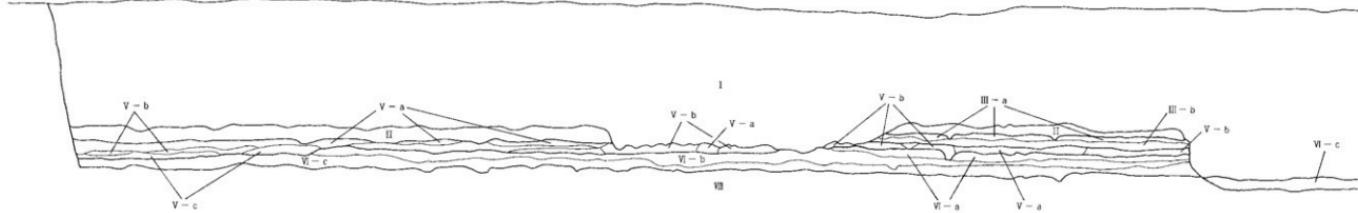
第VII層(上面において掘立柱建物・土壤・柱穴状遺構を検出)

暗青灰色砂質土(5B G4/1)

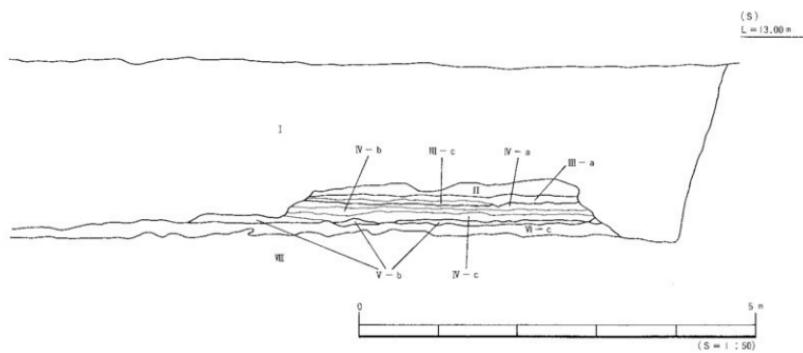
第VIII層(上面において足跡状遺構を検出)

青灰色シルト(10B G5/1)

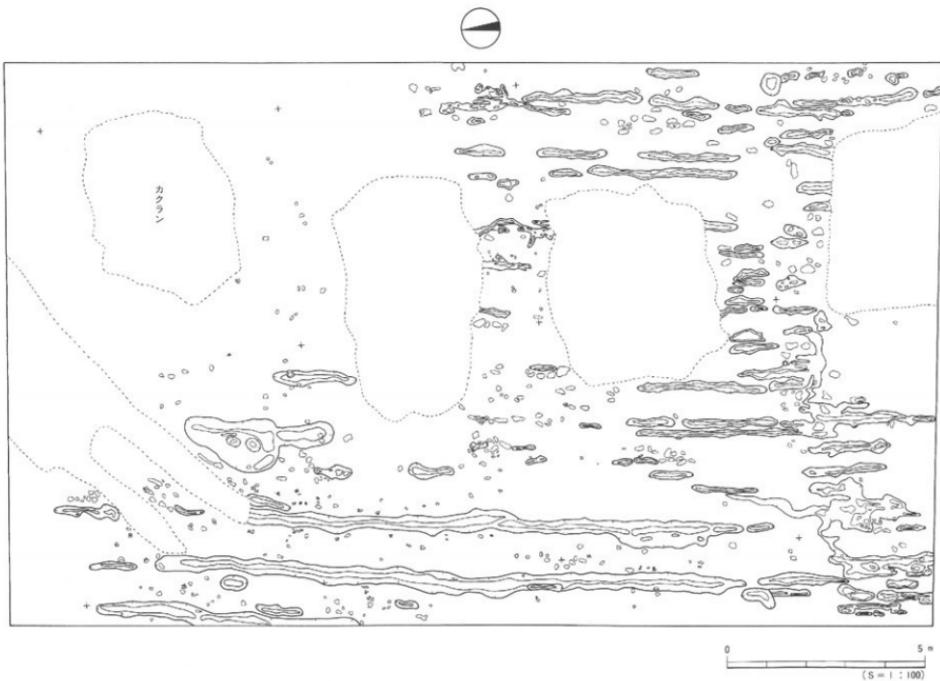
(N)



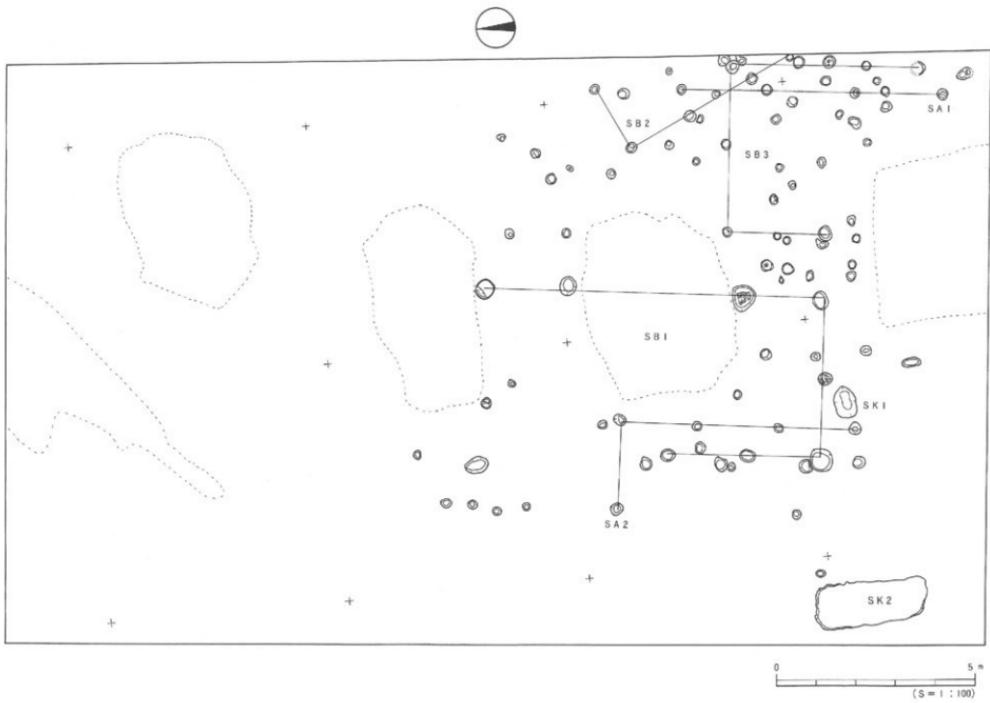
(S)

 $L = 13.00 \text{ m}$ 

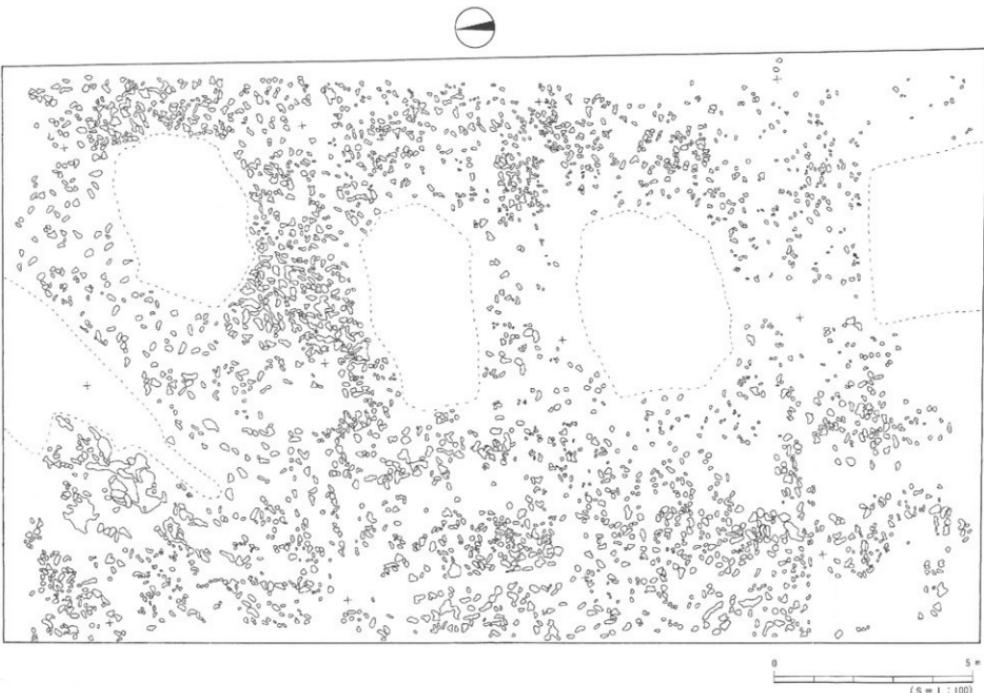
第2図 東壁土層図



第3図 第VI層遺構平面図



第4図 第4層構造平面図



第5図 第VII層遺構平面図

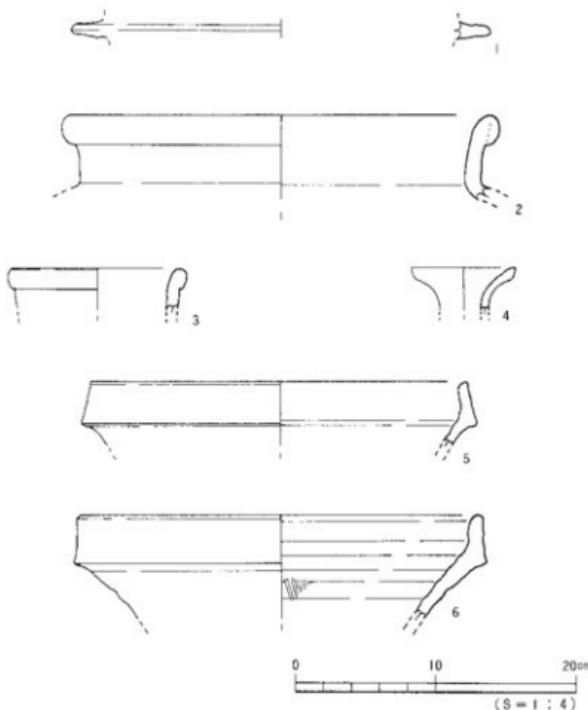
3. 遺構と遺物

今回の調査により、3面の遺構面を確認した。第VI層は直上まで現代の耕作上が堆積しており、南北に延びる小溝群とそれに伴う足跡状遺構を検出した。牛の足跡に混じり人の足跡が見られる。出土遺物は備前焼の搖鉢、土鍋の脚部、土師器片が出土している。第VII層は調査区南側に堆積しており、柱穴、足跡に混じり土師皿とそれに伴う古銭を出土した土坑状遺構・掘立柱建物を検出した。第VIII層は調査区全域にわたって人・家畜の足跡を多数検出した。

第VI層検出遺構

跡跡状遺構(第3図)

調査区の北東部を除く全域において検出した南北方向の小溝群である。この小溝群は、検出長約22m、幅約0.1~0.5m、深さ0.02~0.04mを測る。主軸はS-6°20'-Wとほぼ南北で、埋土は灰色細砂である。0.4~1.5m間隔で16本並んでいる。中には溝間が約1mと広がるもの



第6図 第VI層出土遺物実測図

もあり大咲畔も考えられる。出土遺物は手づくね型土器、備前焼の壺・擂鉢がある。

また、調査区全体においても人・牛の足跡群を検出しており、同様の砂が堆積していることから、洪水により埋没したと考えられる。

出土遺物(第6図)

土師質羽釜

1はやや垂れ気味の鋸部で、鋸端部は丸くおさめられており、鋸下部が煤けている。鋸径30.0cmを測る。

備前焼

壺2は、やや外反した口縁部より、端部は先端を丸く折り曲げ玉縁をつくる口径30.0cmを測る大型の壺である。3は、やや外反した口縁部に玉縁をつくる。口径11.8cmを測る。

徳利形瓶4は、口径7.4cmを測り、口縁部がラッパ状に広がり、端部が尖る。

擂鉢5は、口縁部が内傾気味に上方に立ち上がった外面に凹線を巡らし、口縁端部は内側にカットされている。口径26.9cmを測る。6は口縁部がほぼ真っ直ぐ上方向に立ち上がる。口径28.4cmを測る。

第VII層検出造構(第4図)

調査区南半分において掘立柱建物跡3棟、棚列状造構2基、上坑状造構2基、柱穴状造構93基を検出した。

掘立柱建物

調査区南側において3棟検出した。

S B 1 (第7図)

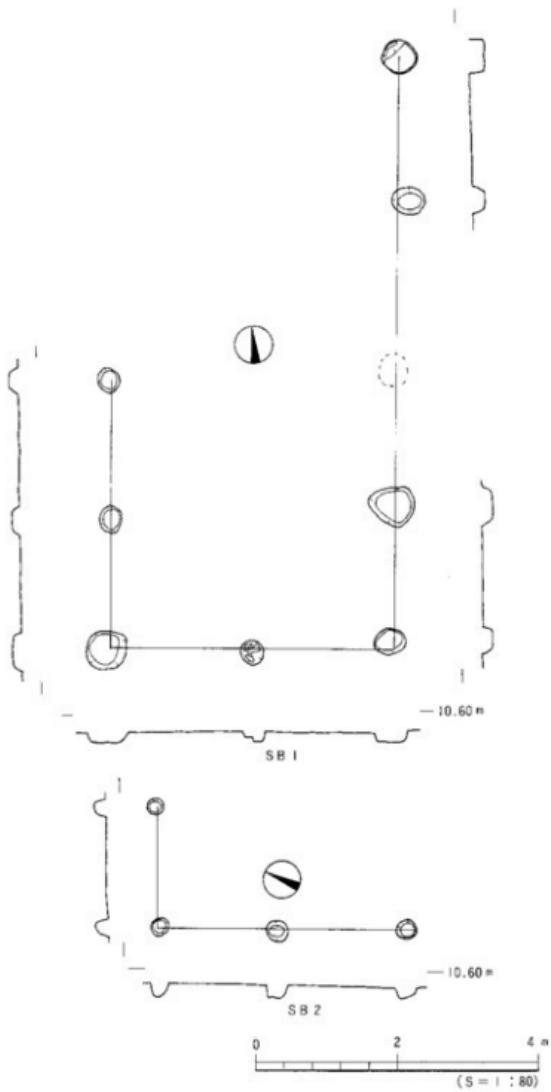
調査区南側のB・C～3・4・5グリットに位置する。棟軸はN-6°-Eと真北を指す。確認されている規模は、梁間2間、桁間4間の南北棟であり、各柱穴は楕円形が主で径0.32～0.65mを測る。柱間は梁方向2m、桁方向は2.1mの梁行4m、桁行8.4m、検出面よりの深さ約0.1～0.2m、柱穴埋土は暗青灰色シルトで、出土遺物は土師器の細片が僅かに出土である。

S B 2 (第7図)

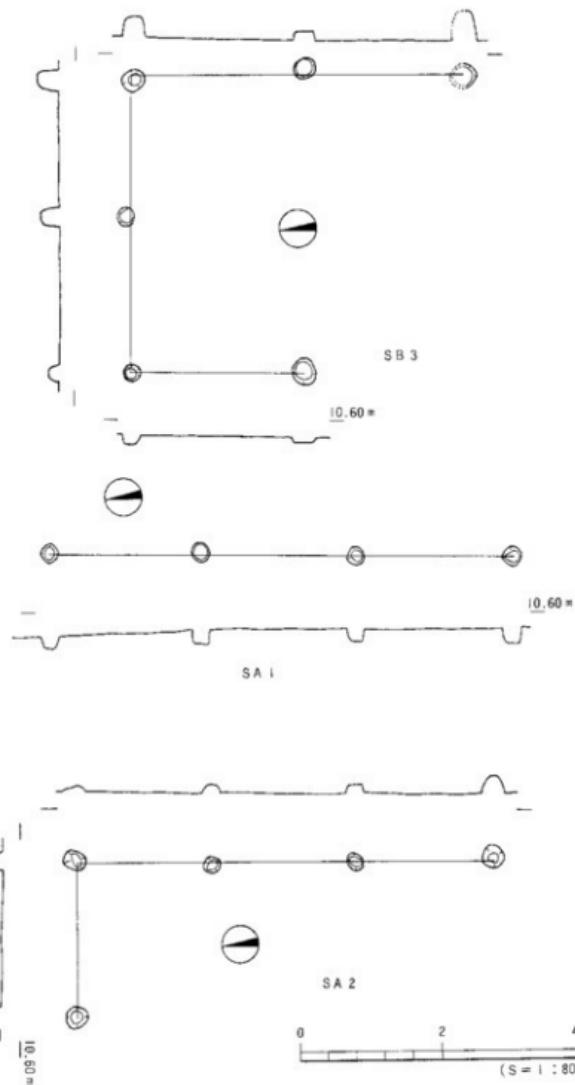
調査区東側のA・B～4・5グリットに位置し、東側は調査区外にのびる。棟軸はN-23°-Wを指す。確認した規模は、梁間1間、桁間2間の南北棟で、各柱穴は円形で径0.2～0.3mを測る。柱間は梁方向が1.8m、桁方向が1.75mの梁行1.8m、桁行3.5mが確認され、検出面よりの深さ約0.15～0.2m、柱穴埋土は暗青灰色シルトで、出土遺物は土師器・瓦器の細片が僅かに出土している。

S B 3 (第8図)

調査区南東部のA・B～4・5グリットに位置し、南側は調査区外にのび、棟軸はN-6°-Eを指す。確認した規模は、梁間2間、桁間2間の南北棟であり、各柱穴はおむね円形で径0.2～0.4mを測る。柱間は梁方向が2.1m、桁方向が2.4mの梁行4.2m、桁行4.7mを確認し、検出面よりの深さ約0.1～0.45m、柱穴埋土は暗青灰色シルトで、出土遺物は土師器細片が僅かに出土している。



第7図 第4層検出造構測量図



第8図 第8層検出構造測量図

柵列状造構

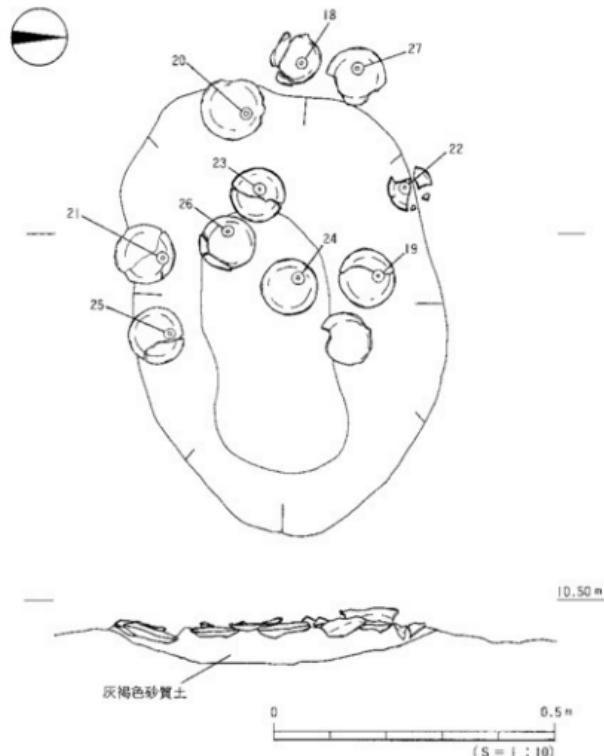
調査区南側において2条検出した。

S A 1 (第8図)

調査区南東部のA・B～4・5グリットに位置する。柱間2.1mの3箇が検出され、検出長約6.6mを測り、軸はN-8°-Eの南北軸で調査区外の南・東側にのびることも考えられ、東にのびれば孤立柱建物の可能性もある。各柱穴は円形が主で径0.2～0.3mを測り、検出面よりの深さ0.2～0.25mを測る。埋土は暗青灰色シルトで、出土遺物は土師器の細片が僅かに出土する。

S A 2 (第8図)

調査区南西部のC～4・5グリットに位置する。南北に柱間2.2m、東西に柱間南北長6m、東西長2.2mを測る。南北軸はN-7°-E、東西軸はE-7°-Sの直角をなす。埋土は暗青灰色シルトで、出土遺物は土師器・瓦器の細片が僅かに出土する。

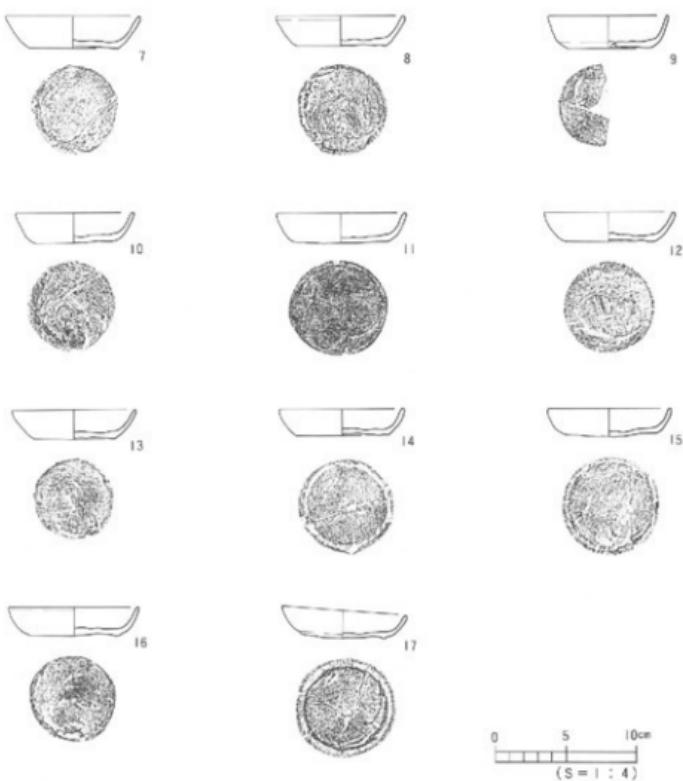


第9図 SK 1測量図

土坑状遺構

SK 1(第9図)

調査区南寄りのC5グリットにおいて検出した。長軸0.82m、短軸0.54m、深さ0.07mを測り、平面形は楕円形、断面形は薄いレンズ状を呈している。主軸はW-5°-Sで、埋土は灰褐色砂質土である。遺構上面西半分に土師皿が11枚全て上向きに不規則に置かれた状態で出土しており、その土師皿の底面に銅銭が1枚づつ載せてある。東側の1枚の皿だけ銅銭が出土しなかつたが、底面に銅銭の痕跡が残っていることより、土師皿11枚全てに銅銭の共伴が考えられる。中には炭化した桺穀の上に古銭を載せているものも1点残存している。



第10図 SK 1 出土遺物実測図

S K 1 出土遺物(第10・11図)

7~17は土師器皿である。底部切り離し技法は全て右回転の糸切りで、口径8.4~9.3cm、器高1.9~2.3cmを測る。7・8は底部から口縁部が直線的に立ち上がる。9・10は底部から口縁部が直線的に立ち上がり、底部付近に稜がつく。11~15は底部から内湾気味に立ち上がる。16・17は底部から内湾気味に立ち上がり、底部付近に稜がつく。

土師皿と共に伴した銅銭18~27は北宋錢4種4枚、明錢2種5枚、不明錢1枚の計10枚である。

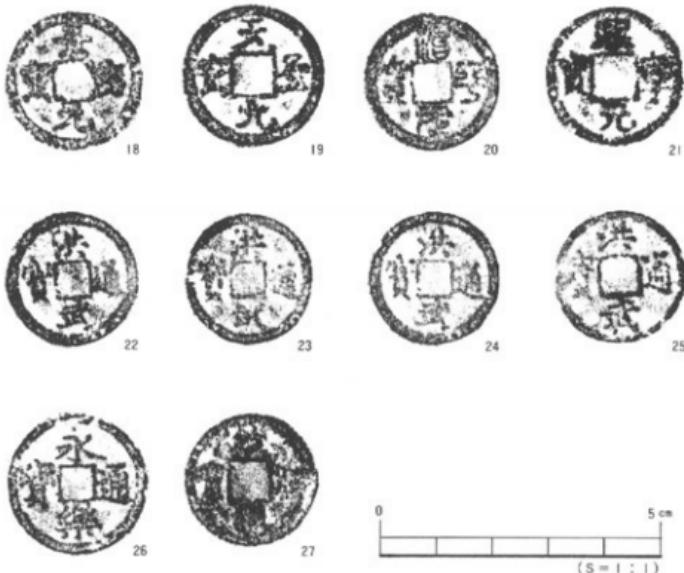
S K 2 (第12図)

調査区南西隅のD4-5グリットにおいて検出した。長軸2.85m、短軸1.1m、深さ0.12mを測り、平面形は隅丸長方形、断面形は長方形状を呈している。主軸はN~0°~Wと、ほぼ磁北に沿っている。埋土は暗緑灰色シルトである。出土遺物は上層より土師器・瓦器の細片が僅かに出土しているだけである。

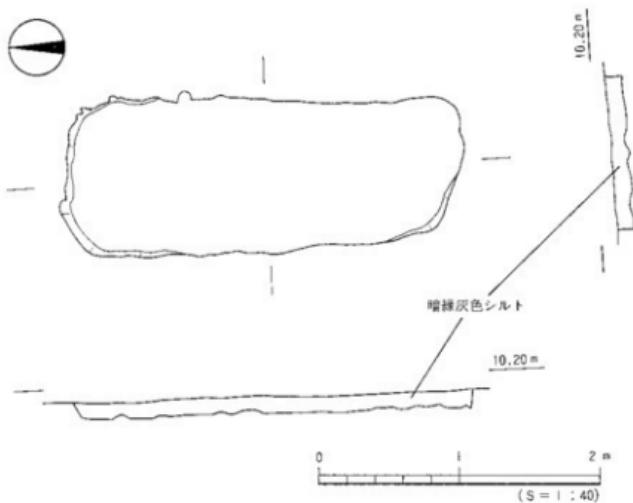
柱穴状造構

S P 36(写真図版六一)

B4グリットにおいて検出した。長軸0.25m、短軸0.2m、深さ0.35mを測る。平面形は梢円形を呈しており、柱穴上部から下部にかけ炭化材が立った状態で検出された。



第11図 SK 1 出土銭拓影



第12図 SK 2 測量図

第VII層検出遺構(第5図)

調査区全域において堆積しており、人・牛の足跡を多数検出した。全ての足跡内に砂が堆積していることから、洪水により埋没した可能性がある。

出土遺物(第13図)

土師器碗

28は輪高台の底部をもつ。高台径は5.4cmで三角形の断面形状をもつ。底面の切り離し技法は不明である。

土師器杯

29は土師器杯で平底の底面より内湾気味に立ち上がり口縁部が外反し、若干肥厚されている。口径11.6cm、器高4.2cm、底径4.8cmを測る。30はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖る。口径10.8cmを測る。

土師質土鏡

31は逆ハ字形に開いた口縁部で端部は肥厚され端面が凹んでいる。内面に刷毛目調整がみられる。口径26cmを測る。

土師質土釜

32・33は内湾した口縁部をもち、32は口径21cmを測り、口縁外面に断面三角形の凸帯が貼り付けられている。33は口径21cmを測り、やや垂れ気味に断面三角形の凸帯が貼り付けられて

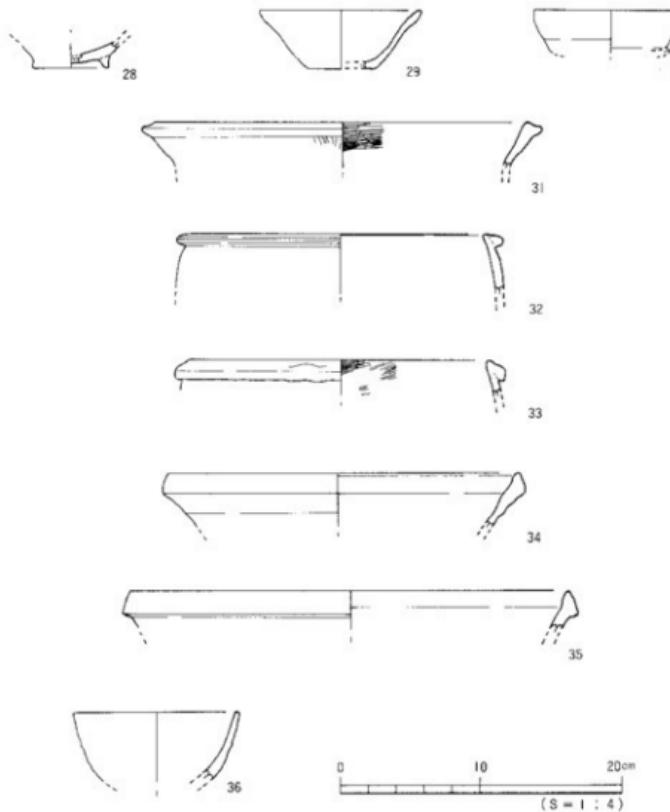
おり、内面に刷毛目調整がみられる。

須恵器こね鉢

34・35は束縛系こね鉢の口縁部である。34は口縁部が断面三角形状を呈しており、内面の凹凸が著しい。口径24.5cmを測る。35は口縁部が上下方向に拡張し、外面に明瞭な段を有する。口径30.8cmを測る。34・35共に内外面は横ナデ調整が施されている。

青磁碗

36は内湾した胴部より端部は丸く仕上げられており、外面端部付近に1条の沈線が施されている。口径11.5cmを測る。



第13図 第7層出土遺物実測図

表1 SK1出土銭一覧表

通号 No.	銭名	初發年	時代	直径(mm)	孔径(mm)	上：外緣厚 下：内縫厚 (mm)	重 量(g)	備考
18	景德元寶	1005	北宋	24.8	6.9	1.1 1.1	2.634	類 説
19	天聖元寶	1023	北宋	25.0	6.8	1.3 1.3	3.184	類 説
20	治平元寶	1064	北宋	24.2	6.7	1.3 1.2	3.065	類 説
21	熙寧元寶	1068	北宋	24.2	7.3	1.5 1.3	3.026	類 説
22	洪武通寶	1368	明	23.4	5.8	1.6 1.5	3.785	対 説
23	洪武通寶	1368	明	22.5	5.9	1.5 1.3	2.027	対 説
24	洪武通寶	1368	明	23.8	5.8	1.5 1.3	2.227	対 説
25	洪武通寶	1368	明	23.7	6.1	1.6 1.5	3.362	対 説
26	永樂通寶	1408	明	24.9	6.8	1.2 1.1	2.837	対 説
27	不 明			23.7	6.1	1.5 1.0	3.042	

【参考文献】

- *宮本一夫『轟子遺跡・博味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室 1989
- *田崎博之『博味遺跡II』愛媛大学埋蔵文化財調査室 1993
- *岡田敏彦『一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書I - 松環古照遺跡 -』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1993
- *栗田正芳『古照遺跡 - 第7次調査 -』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター 1993
- *上田 真『南江戸闇目遺跡』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991
- *岡壁忠彦『備前焼』(考古学ライブライ-60)ニューサイエンス社 1991
- *高倉敏明『高崎遺跡調査報告書』多賀城市埋蔵文化財調査センター 1989
- *『徳島県埋蔵文化財センター年報』徳島県埋蔵文化財センター 1991

第IV章 調査の成果と課題

1. 第10次調査

本調査地では、既往調査の特に第8・9次調査により確認された古墳時代中期前半(5世紀前半)の黒色粘土層を中心に調査を行った。その結果、この黒色粘土層において、畔の検出には至らないが当時の水田跡と考えられる土層であることが理解され、当時の水田は、当地以東にも展開するものと思われる。また、調査地中央の西側を北から南東方向に存在したと思われる河川を確認し、さらにその河川に伴う祭祀遺物群を検出した。

層位的には、土層の堆積状況の検討により本調査地が古墳時代から近世・現代に至るまで、洪水を受けながらも連續と農耕生産が営まれていたことが判明した。これらの事は、当調査地域が農耕生産に好適な立地環境を有していたためであり、しいては古墳時代前期に埋没した井戸の存在からも窺えるであろう周辺地域の環境とも密接な関係を持つものである。

前述の河川祭祀にともなう土師器群の出土は、今後、第9次調査成果と合わせて祭祀行為における遺物の空間的位置関係や器種構成などが考察されるものである。また、これらは当該期の良好な一括土器群でもあり、貴重な資料を得た。この他に、古照遺跡の東方約50mに所在する古照ゴウラ遺跡3次調査地(1)において、当該期と同時期とみられる土師器廃棄上坑が確認されており、当地の周辺に広がる集落の可能性は水田と同様に古照遺跡の東域が考えられる。今後は蓄積される調査成果も合わせ、当時の古地形の解明および集落域と水田跡等の生産域とのかかわりについての詳細な調査検討が課題である。

平安時代に比定されるS D 1から出土した遺物の中には、県内でも類例をみない竹製の編み籠(または笊)の出土があり、この編み方については遺物説明でも考察している。また、共伴する黒色土器・土師器等は、道後平野の古代土器の変遷を考察する上でも基準的資料になり得るものであり、重要な資料である。

当調査地は小規模な調査区ではあったが、各時期の重要な遺構・遺物の出土をみることができた。これらの調査成果は、平成4年度に行われた第8・9次調査の報告書において、さらに検討を加え報告する予定である。

[註]

(1)松村淳・宮崎泰好「古照G遺跡(3次)」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会 1989

2. 第11次調査

今回の調査において、中世期の3層におよぶ遺構面を検出した。第VI層上面において跡跡状遺構が河川の氾濫である砂層に覆われた状態で検出された。出土遺物より16世紀代に営まれていたと考えられる。第VII層は、調査区南半分においてだけの堆積であるが、掘立柱建物、柵列柱穴、祭祀遺構を検出した。これらは6次上層調査地D区検出の遺構と同様に、隣接する7次調査A地区・第VI層検出の墓原に関連する生活域の広がりが考えられる。SK1は、松山平野において出土例の少ない特異な祭祀遺構であり、この遺構は遺物の出土状況より、浅い土坑に土師皿と古銭を埋納し、板を散布したことが推測され、屋敷の中で執り行われた地鎮の遺構と考えられる。SK2は埋土や輪方向より7次調査で検出されたAグループ(長軸が南北方向で磁北に沿うもの)に属しており、掘り方、土層、遺物の残存状況より粘土の採掘坑も考えられ、15世紀の後半から16世紀前半にかけての生活域が確認できた。第VIII層検出の足跡より、中世の水田が営まれており、7次調査・第VI層で検出された13世紀代の埋没水田とのつながりも考えられるが、今後の課題として、人や家畜の足跡以外の穴跡が、形状や規則性よりどの様な性格をもつものか検討が必要である。

写 真 図 版

古照遺跡

—第10次調査—





1. A区全景(南から)

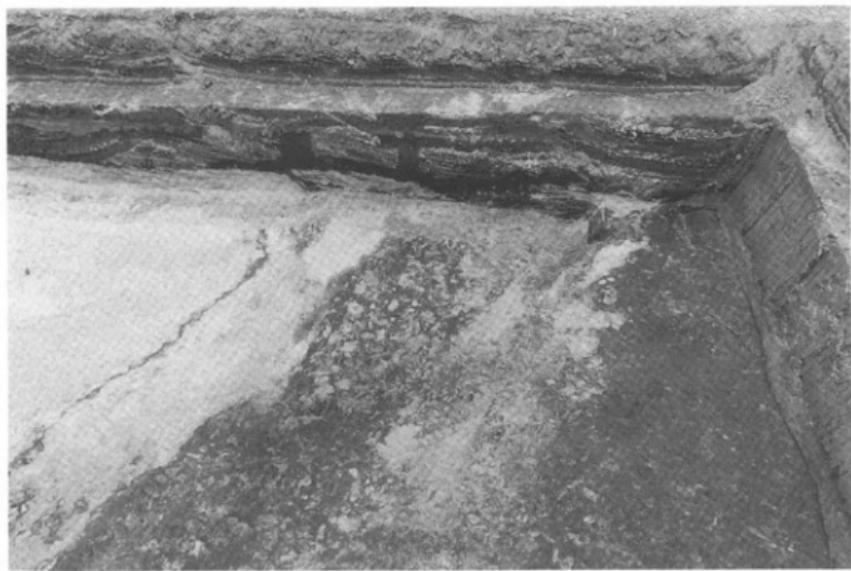


2. 北東壁断面状況(西から)

図版二



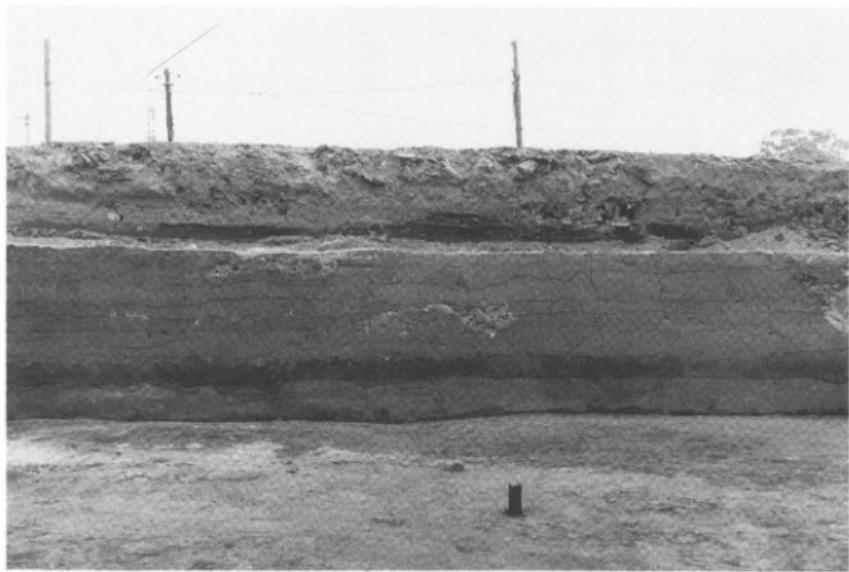
1.B区全景(南から)



2.遺構検出状況(西から)



1. 東壁断面全景(南西から)



2. 南壁断面状況(北から)

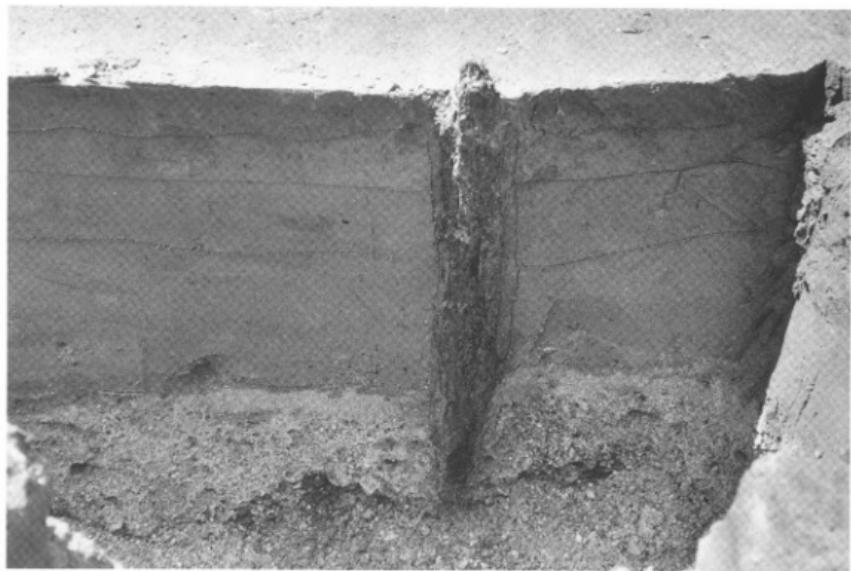
図版四



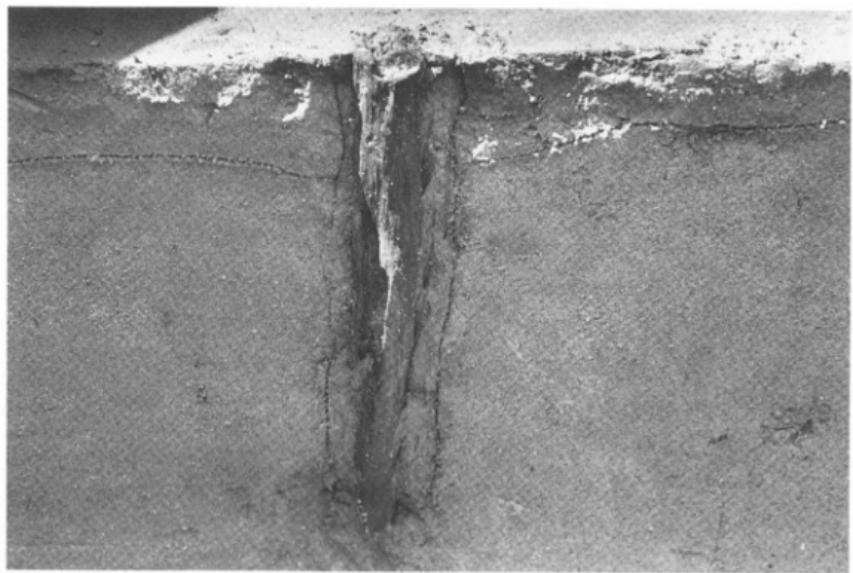
1. S.D. 1 及び土層検出状況(東から)



2. S.D. 1 検出状況(北から)



1.杭1断面状況(北から)

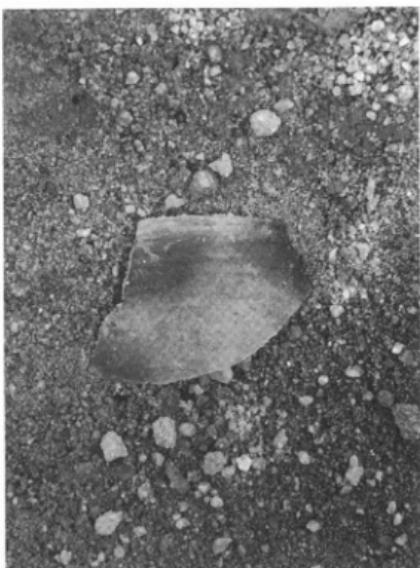


2.杭2断面状況(北から)

圖版六



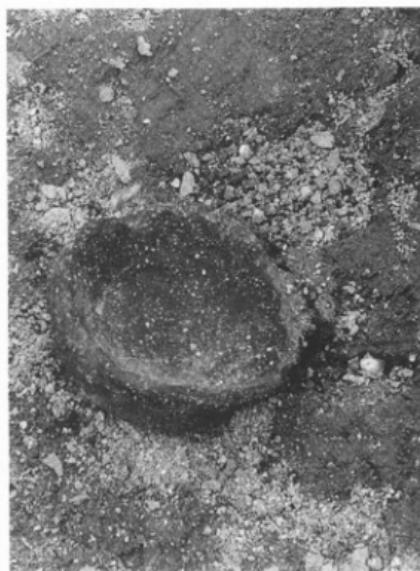
1.遺物出土狀況



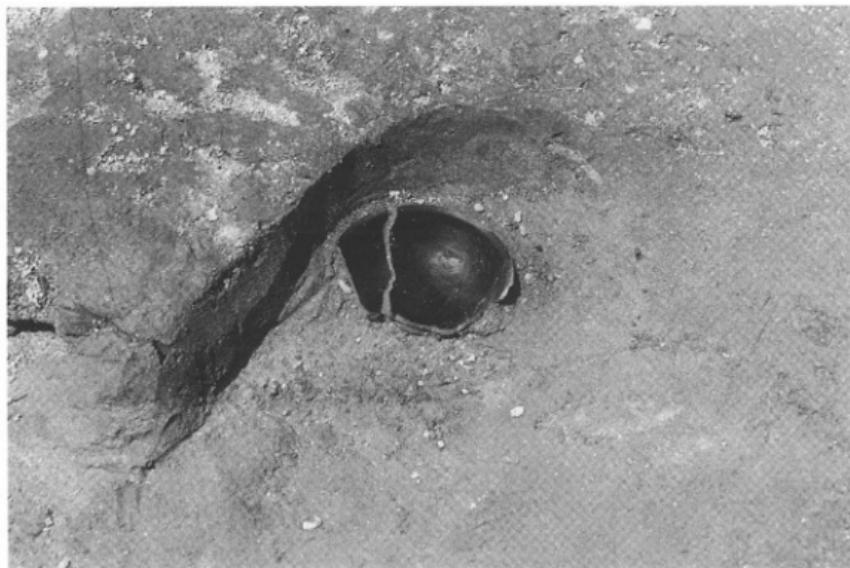
2.遺物出土狀況



3.遺物出土狀況



4.遺物出土狀況

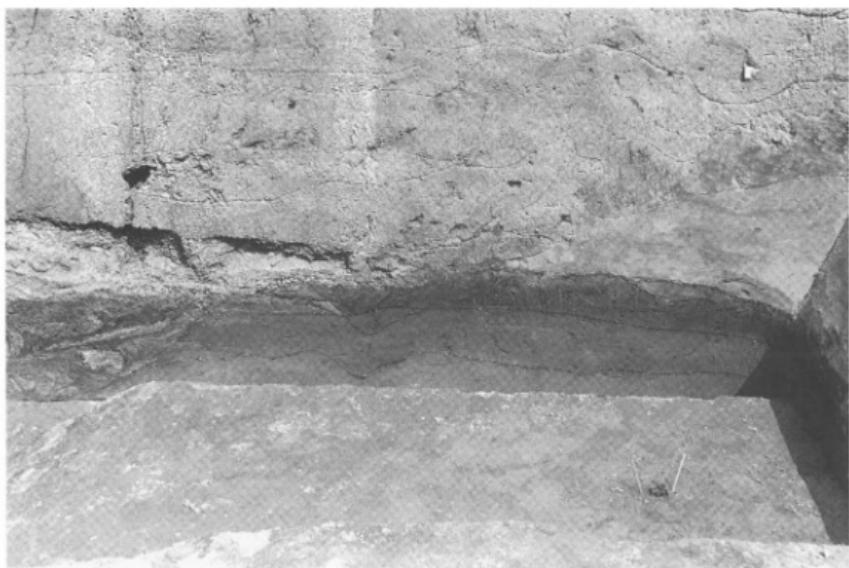


1. 遺物出土状況



2. 箕状木製品出土状況(北から)

図版八



1.南東壁隅部 S D 1 下部断面状況(西から)



2. C区作業風景(北西から)

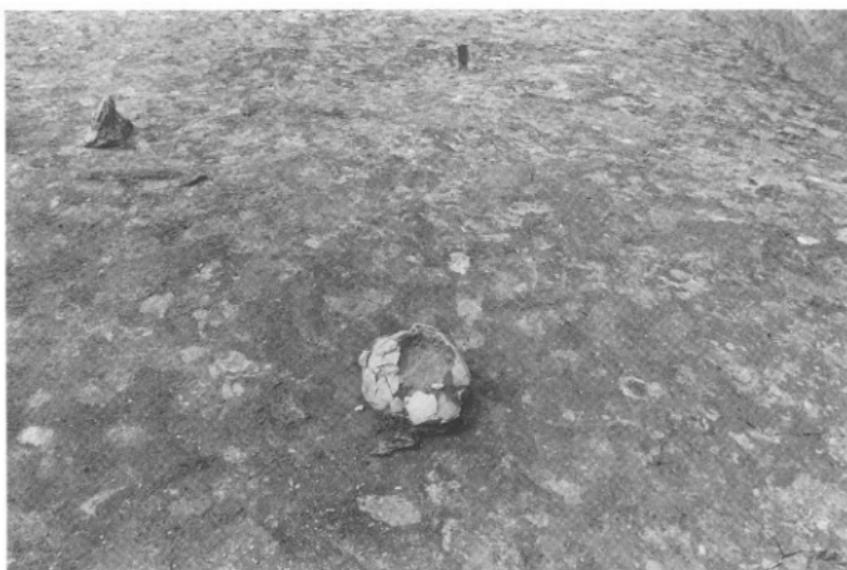


1.C区全景(北西から)



2.遺物出土状況(北西から)

圖版十



1. 遺物出土状況



2. 祭祀土器群遠景(東から)



1. 祭祀土器群検出状況(東から)

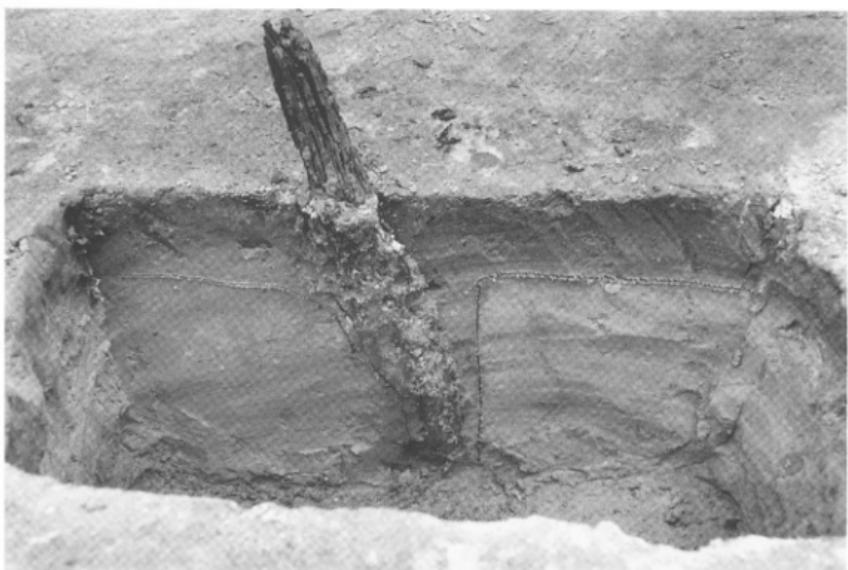


2. 祭祀土器群検出状況(北から)

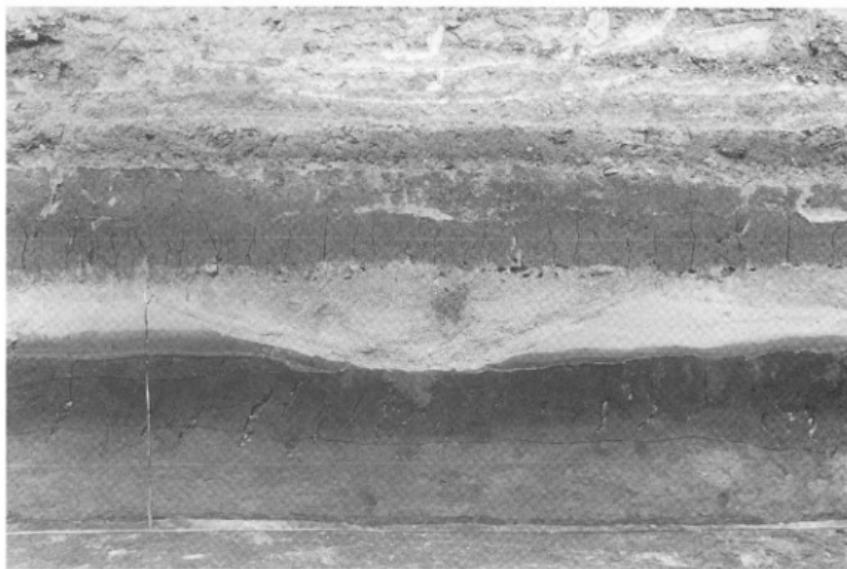
図版十二



1. 杭列断面状況(北から)



2. 杭断面状況(南から)

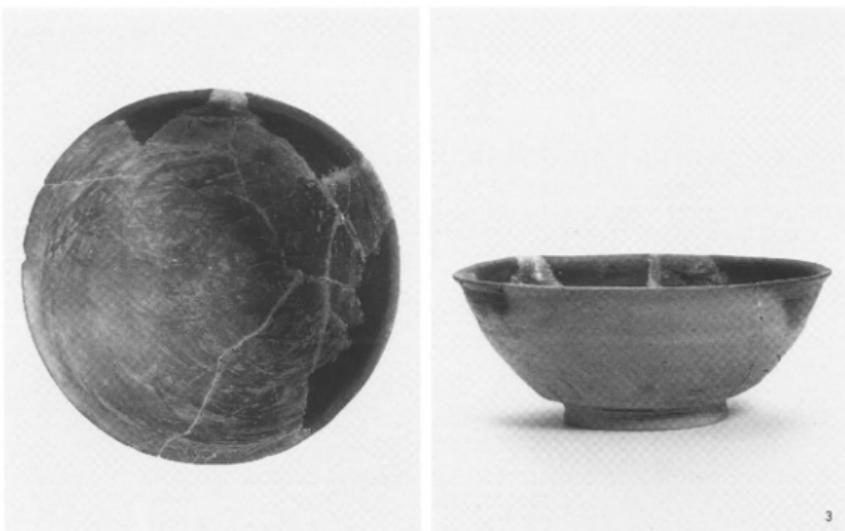


1. 東壁断面状況(西から)

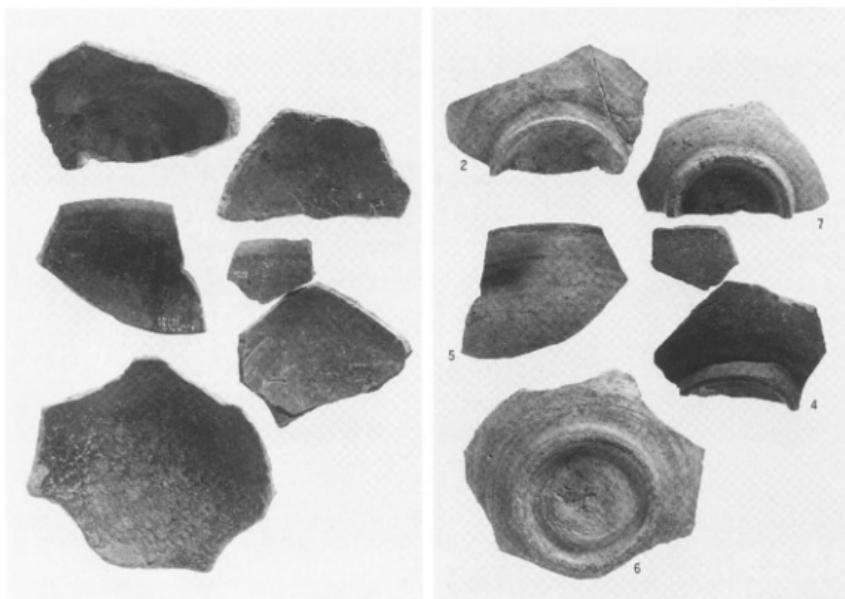


2. 東壁断面全景(南西から)

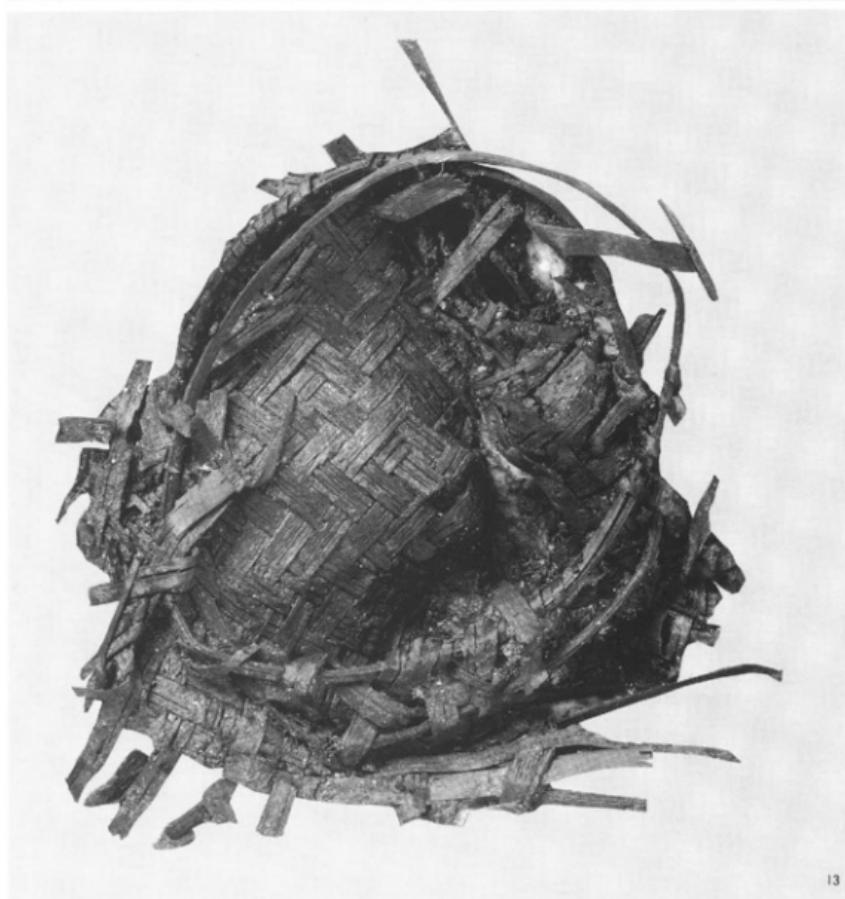
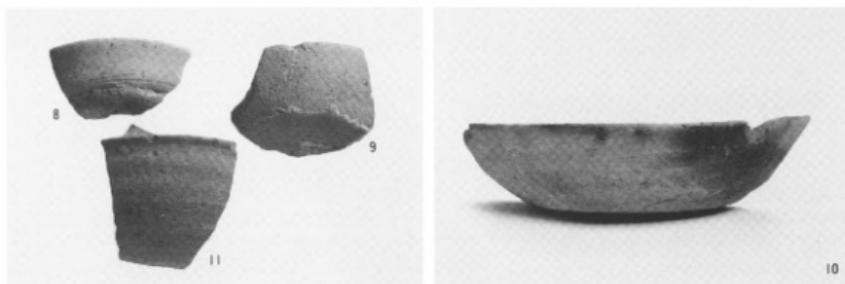
圖版十四



1. B区SD 1出土遺物



2. B区SD 1出土遺物



I. B区出土遺物，B区出土籠状遺物



1. B区出土木製品



1.C区出土祭祀土器群



23



25



25



26



27



28

1.C区出土祭祀土器群



31



32



30



36



37

1.C区出土遺物(30・31・32)・調査区外出土遺物(36・37)



写 真 図 版

古照遺跡

— 第11次調査 —





1.調査地全景(西から)



2.作業風景(北西から)

図版二



1. 東壁土層(西から)



2. 第VI層上面遺構検出状況(南から)



1. 第VI層上面遺構完掘状況(南から)

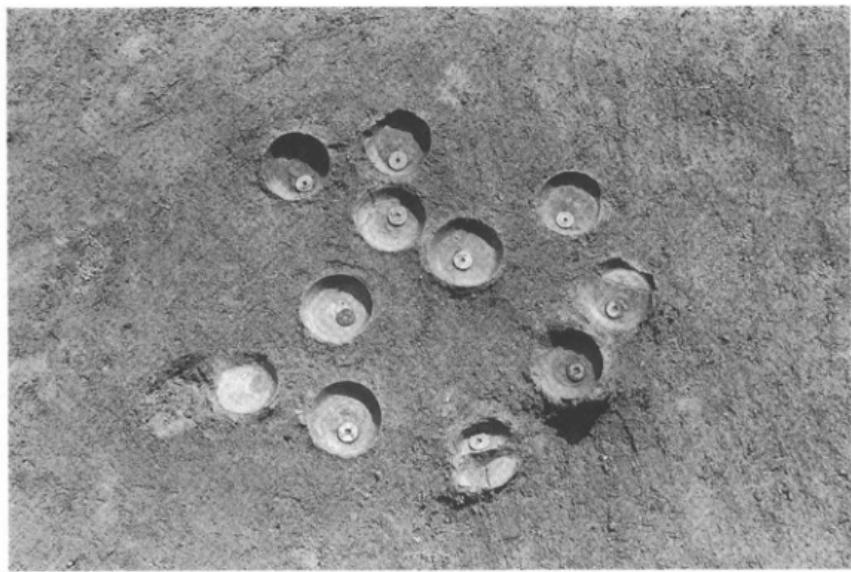


2. 第VI層上面遺構完掘状況(北から)

図版四



1. 第VII・VIII層上面遺構検出状況(南から)



2. SK 1 遺物及び遺構検出状況(北から)

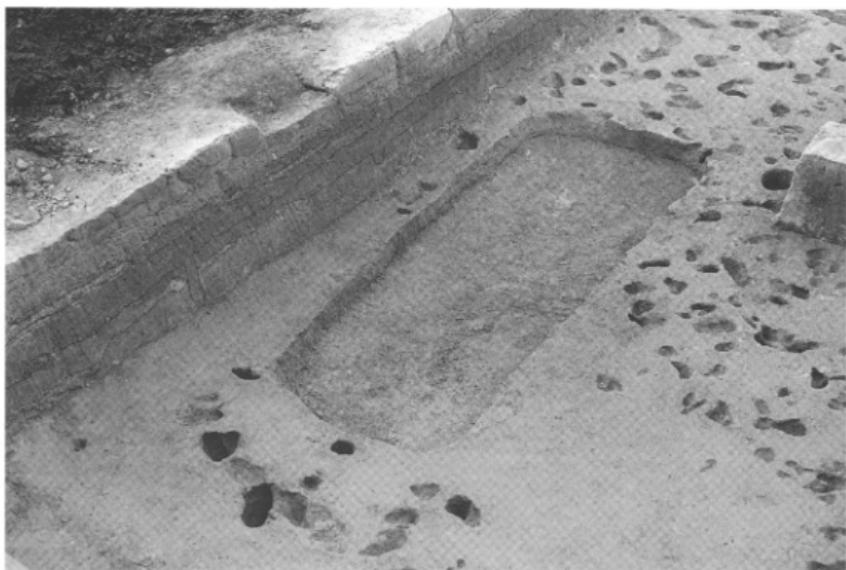


1. SK 1 遺物出土状況(東から)

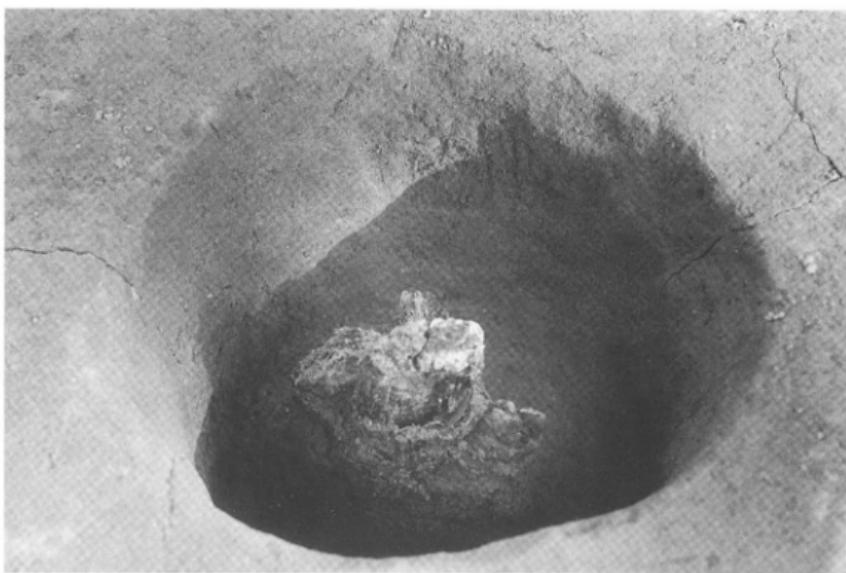


2. SK 1 遺構完掘出土状況(南から)

図版六



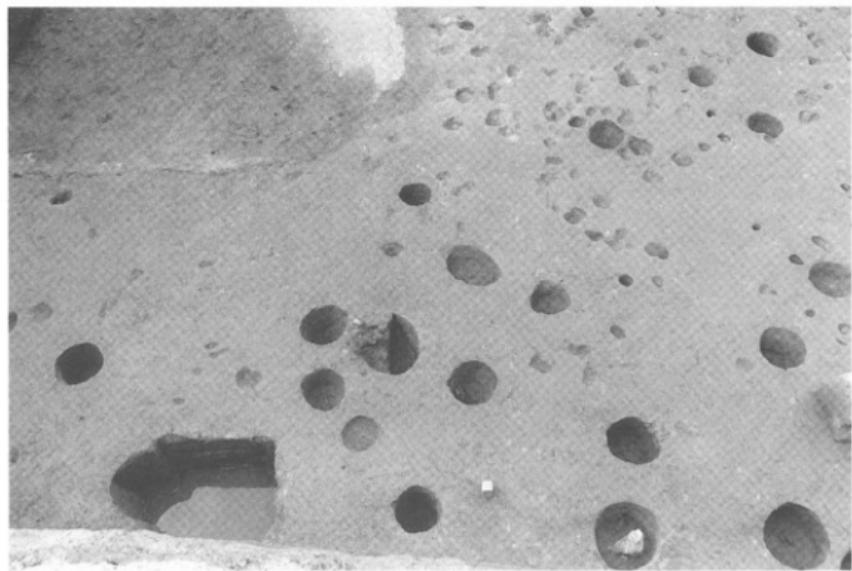
1. SK 2遺構完掘状況(南東から)



2. SP 36遺構完掘状況(西から)

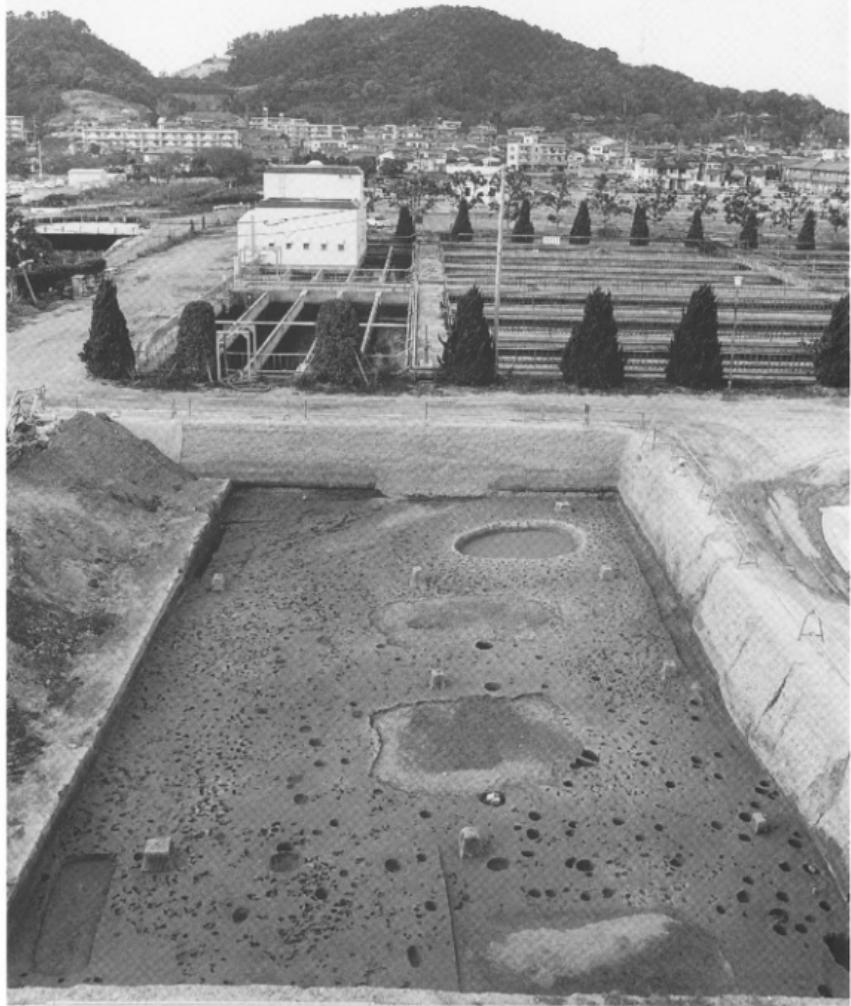


1. S P 84遺構完掘状況(西から)



2. 第VII・VII層上面遺構完掘状況(東から)

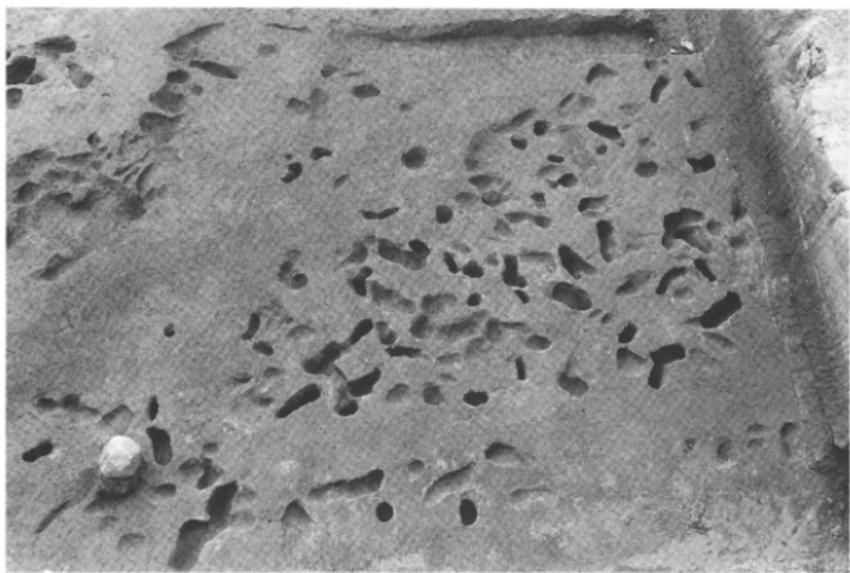
図版八



1. 第VII・VIII層上面遺構完掘状況(南から)

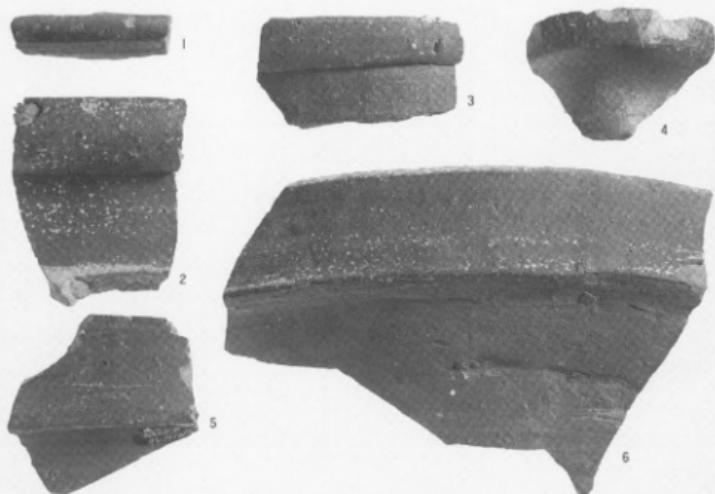


1. 第VII・VIII層上面遺構完掘状況(北西から)



2. 第VIII層上面足跡完掘状況(北から)

圖版十



1. 第V層出土遺物



2. SK 1出土遺物



17



9



7



12



11



15



18



19



22



21



23



20



24



25



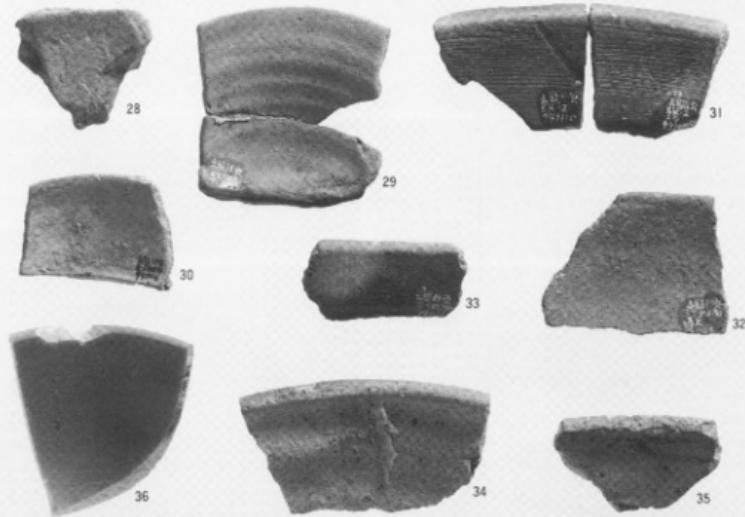
26



27

1. SK 1 出土遺物

圖版十二



1. 第VII層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こでらいせき							
書名	古照道路							
調査名	第10・11次調査							
シリーズ名	松山市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第47集							
編著者名	栗田正芳・小笠原貴治・河野史知							
編集機関	財團法人 松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター							
所在地	〒791 松山市南斎院町乙67-6 Tel0899-23-6363							
発行年月日	西暦 1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
こでらいせき 古照道路 たいじじとうき 第10次調査	まつやましのみみきど 松山市南江戸 まちょううめえー イ町丁目1-1 まつやまじしすいどうちゅうおうかくじょうかせんた 松山市下水道中央浄化センター	38201	33°50'02"	132°45'18"	19930401 ~19930529	830	地下連絡通路	
こでらいせき 古照道路 たいじじとうき 第11次調査	どうじょう 同上	38201	33°49'58"	132°44'36"	19950901 ~19951122	364.46	汚泥消化タンク	
所収遺跡名	種別	古な時代	古な遺構	古な遺物	特記事項			
古照道路 第10次調査	生産	古墳・平安	講…1条 杭列 水田	土師器・須恵器 黒色土器・本杭 甕状木製品	古墳時代の河川整地			
古照道路 第11次調査	集落 生産	鍛冶・窯町	獨立柱建物…3棟 櫛列・土坑 水田 足跡	土師器・須恵器 陶磁器・古銭	窯町時代の地鍋造構 中世の水田			

松山市文化財調査報告書 第47集

古照遺跡—第10・11次調査—

平成7年3月31日 発行

編集 松山市教育委員会
発行 〒790 松山市一番町4丁目7-2
TEL (0899) 48-6605

財團法人松山市生涯学習振興財團
埋蔵文化財センター
〒791 松山市南斎院町乙67番地6

TEL (0899) 23-6363
印刷 原印刷株式会社
〒791 松山市山越4丁目8-15
TEL (0899) 24-8823
